

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

*特集
言葉をつくる——編集・企画立案の考え方

小熊英二 1

「インタビュー」 普遍的な言葉を求めて

尾方邦雄 10

歴史を語り伝える言葉——「読む」から「作る」まで

白石正明 15

ずらす言葉、うける言葉——シリーズ「ケアをひらく」を企画して

山田秀樹 20

学術書編集の技法——大学出版部の十年目に思う

*連載

中垣信夫 24

命の形「形の命 No.01 (新連載)

前島康樹 表2

『大学出版』一〇〇号に寄せて

大学出版部ニュース 26

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

No.100
2014.10
秋



一般社団法人
大学出版部協会

『大学出版』二〇〇号に寄せて

前島康樹（大学出版部協会副理事長）

『大学出版』が二〇〇号を迎えた。

一九八六年春の創刊以来、三〇年近くの歴史を有することになる。大学出版部協会の会報を発行しようという声は、一九八三年、協会創立二〇周年の前後からあつたようだが、一九八五年に協会報の発行を正式に決定、翌年の『大学出版』の創刊となった。

創刊当時の協会幹事長だった石井和夫氏は、昨年の協会創立五〇周年記念の歴代幹事長・理事長に対するインタビュに答えて、『大学出版』を創刊した理由の一つとして、協会内で大学の教科書づくりについての議論をしていた際、大学出版部としての編集のノウハウ、営業のノウハウ、大学との関係構築のノウハウ等について、より広く共有していく必要を感じ、そのための冊子の発行を考えたと述べられている。協会創立三〇周年の一九九三年からは現在と同じ年四回の発行となり、また、二〇〇九年の八〇号からは広告掲載も実施し、より社会への情報発信を意識した誌面づくりを目指している。

二〇〇号を迎え、デザイン、連載を一新した。

今後も我々の目的である「大学が生成・保有する学術・文化的成果を広く社会に伝達し、以て大学出版の普及と啓蒙につとめる」ために、学術出版をめぐる時宜に適った、興味深いテーマの特集記事を柱とし、より豊かな誌面づくりに傾注していくつもりである。ご期待ください。

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press
慶應義館
Keio Tsushin Co., Ltd
産業能率大学出版部
Sanrio Institute of Business Administration
玉川大学出版部
Tamagawa University Press
中央大学出版部
Chuo University Press
東海大学出版会
Tokei University Press
東京大学出版会
University of Tokyo Press
東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press
東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press
東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press
法政大学出版局
Hosei University Press
明星大学出版部
Meiji University Press
早稲田大学出版部
Waseda University Press
名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press
関西大学出版部
Kanai University Press
九州大学出版会
Kyusyu University Press

大学出版

'86 春



大学出版部協会
Association
of
Japanese University
Presses

『大学出版』1号表紙。

大学出版

大学と社会を結ぶ知的ネットワーク

NO.80
2009.11


秋

特集
変容する専門書マーケット
取次への対し出版進歩の未来
――東京大学出版部副理事長 前島康樹――

内容要約
『大学出版』創刊号の巻頭として、学術出版の現状、今後の展望、そして、大学出版部の役割、そして、大学出版部の未来について、前島康樹氏が語る。

●巻頭
切羽詰った学術出版の現状と未来
切羽詰った学術出版の現状と未来
前島康樹（一） 前島康樹（二）
本誌創刊号（一） 一六～一七

一般社団法人大学出版部協会
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESS



『大学出版』80号表紙。

普遍的な言葉を求めて——小熊英二先生に訊く

【解説】小熊英二先生は、一九六二年生まれ。出版社勤務を経て、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程修了。現在、慶應義塾大学総合政策学部教授。著書に、『単一族神話の起源』、『日本人』の境界、『民主』と『愛国』、『1968』（以上、新曜社）、『増補改訂 日本という国』（イースト・プレス）、『社会を変えるには』（講談社）などがある。

出版不況が深刻の度合いを深め、学術の言葉が読者に届かない状況のなかで、読者に届く言葉を生み出し続ける小熊先生に、ご自身の言葉の生産活動や、言葉と出版をめぐる環境の変化について伺った。

聞き手・慶應義塾大学出版会・上村和馬／構成・細野秀太郎

普遍的な語り

先生はかつて岩波書店の編集者でいらしたわけですが、なぜ言葉に係わる仕事を選ばれたのでしょうか。

私の場合、もともと本を読むのが好きという人間ではありませんでした。今でも趣味で本を読むようなことはない。音楽や映画のように、直感を介した表現の方が好きです。

私の大学時代は、人文・社会科学のニュー・アカデミズム

が流行っていた時期でしたが、馴染みがなかったし、読んでもいませんでした。出版社を受けたのも、いわゆる大企業に入って転動する人生は嫌だったのが一つの理由で、転動のない会社ということを考えて出版社を受けた。よく通ったなと思いますが、大学時代に反核・反原発の市民運動を手伝っていたのが評価されたいです。

——『世界』の編集部にいらしたんですね。その時に企画の立案や取材にも携わられて、編集のイロハみたいなものを

体得されたのでしょうか。

企画や編集といっても、系統的に教えてもらうこともなく、必要な時に助けてもらいながら習ったという感じですが、大学は理科系でしたし、人文・社会科学関係は殆ど何も知らないに等しい状態でした。だから、雑誌の編集実務もさることながら、そこで自分なりに勉強したことが大きかったです。雑誌の仕事では、政治学や経済学、自然科学、文学、市民運動など、さまざまな人に接触するわけですからね。

しかし、もともと言葉に淫するタイプでもないし、人文・社会科学にはなじみがない。だから終始、客観的だったと思います。原稿を依頼しても、書いてもらったものが私自身に理解できないときは、読者にも理解できないだろうと思いい、書き直してもらおうのが役割でした。

またそれぞれの学問領域は、越境的なやり取りがないわけです。政治学の世界で有名だといっても、他の業界の人は全く知らなかったりする。自分は社会科学になじみがないから、知らないほうが当たり前だとも思う。社会学でも政治学でも経済学でも、小さなサークルがあり、狭い争いをやっている。それを横目で見ながら、狭い世界でしか通用しない定型的な言葉の語り方は面白くない、そうでは無い普遍的な語り方がもっとあるだろうと思っていました。

売れないものは出さない？

——『単一民族神話の起源』、『日本人』の境界』、『民主』と『愛国』、『1968』は、いずれも浩瀚で学術的な内容でありながら、一方でとても読みやすい言葉で書かれています。執筆の際、具体的な読者層を念頭に置いて、言葉を変換したり彫刻するような意識があったのでしょうか。

編集の仕事をしていたので、学術業界の人しかわからない語り方ではふつうの人は読まない、という感覚は当然ありました。もともと学術業界の出身ではありませんね。それと先ほど述べたように、ある領域の定型的な語り方は好きじゃない。一冊目の『単一民族神話の起源』と二冊目の『日本人』の境界』について言えば、当時の社会学の流行とは外れていた。あの二冊は、もとは一つの研究だったものを長すぎるので二つに分けて出したのですが、私が会社を退職して大学院に行った一九九三年頃の社会学では、ゲーム理論や社会システム論が流行っていて、歴史的な研究をやる人はあまりいませんでした。その後はポストコロニアリズムとかが流行ったけれど、私にはよくわからなかった。

挙げていただいた四冊は、過去の資料からさまざまな言葉を集めて、それを編集していく仕事でしたが、私が面白いと思う言葉自体、当時のコンテクストから少し外れたようなものが多い。定型的なものを避けていたら、結果として面白いと評価された、というのが実感ですね。



——一連の著書では、いずれも膨大な言葉を掘り上げられているわけですが、『1968』は、特に引用が多く、「声の事典」的であり、ポリフォニックで、読んでいて実際に自分がそこにいるような錯覚に陥る感じがありました。

引用を多くしたことに特に意図はなくて、素材に適したやり方をしたというだけです。『1968』の場合、理由の一つは、学生の表現力が乏しかったこと。丸山眞男なら三行で言えるだろうことを一〇行かかって言うみたいなのが多い。だから引用も、結果として長くなってしまふ。もう一つは、植民地支配や戦争のような大文字の話ではなく、大学の片隅で行われていた非常にせまい世界の話ですから、微細な情景まで感じられるように書かないと、読者

が読めるものにならないという判断もありました。また、ロジックで追えない社会心理が対象だったので、感情面を含めた論理外の描写を重視したから、長くなったというのもありますね。

挙げていただいた長い本を書くときに考えていたのは、あるテーマを証明するための論証をするというより、読者にその当時の思考過程、試行錯誤の過程を共有してもらったことでした。当時の感覚や論理はどのようなものだったのか。なぜ、彼らはそのように行動し、考えたのかを、時代の限界を含めて分かち合ってもらおう。当時の文脈や価値観を丸ごと再現しようとするわけですから、どうしても長くなりましたね。

——企画を構想される時は、緻密な見取り図や設計図をあらかじめ準備されるのですか。

最初の手さぐりの段階ではそれほど多くの資料を読んでいるわけではないので、見取り図や設計図は特になく、ただやってみようと思うわけです。資料を読んでいくうちに、なぜこのような発想をしたのだろうかとか、この人は面白いとかいうことがたまって行って、少しずつテーマが収斂していくわけです。そうやってテーマが固まると、本としてのアウトプットの形は、最初から見えますね。これならたぶんできる、それなりの規模の仕事になるだろう。そこ

そこ売れるか、少なくともペイはするだろうといったことは考えますね。

— 売れる、売れないといった辺りは、かなりシビアに考えられていますか？

ペイしないということは、世の中が必要としていないということだと思います。何か普遍的なものにつながれば、普遍的に評価してくれる人はある程度いる。そこをクリアできるプロジェクトは、結果としてペイするだろうと考えます。

もちろん全く別の考え方もあります。数学や物理学の画期的な論文などには、一般の人は読まないけれども重要なものがあります。業界の人は、いくら払っても手に入れない。その種のもは一冊数万とか数十万で売ればいい。学問以外でも、下水処理の業界誌とかもあるわけで、そういうものは少量高額生産で成り立つ。そういうものの価値はもちろんあるわけですが、私がやるべきこととは考えないです。

シンボルのない時代

— 著書の話に戻りますが、先生は三・一一以降、『東北』再生、『辺境』からはじまる、『社会を変えるには』、『平成史』、『原発を止める人びと』と、立て続けに新刊を出さ

れています。この間の言葉の生産活動の変化について、三・一一の影響も含め、お話しいただけますか。

傍目には、突然活発になったり、時事的なことに関心がシフトしたように見えるかもしれませんが、自分としては大きな姿勢の変化があったとは思っていません。

個人的には、二〇〇九年の七月に『1968』を出した後に倒れて、一年以上は何もできませんでした。それで、リハビリも兼ねて過去の評論をまとめる作業をして、それがたまたま、二〇一一年三月一〇日の日付で出ています（『私たちは今どこにいるのか』）。ようやく調子が戻ってきたのが二〇一一年二月くらいで、医者に「もう来なくていいよ」と言われたのがその年の四月です。個人的には、三・一一を挟んでそのような体調の変化がありました。

体調以外の変化で言うと、一年ほど寝ている間に、次の研究について考えました。ところが、過去四冊のような仕事に値するような、これと思うテーマがありませんでした。

『平成史』の「まえがき」にも書いたのですが、社会や歴史を描こうとするときは、全体をそのまま描けないから、象徴的なものを取上げて描く。たとえば「日本人の自意識」の歴史を書くにあたり、日本民族起源論の変遷を描くというやり方をするわけです。ところが、現代にはそういう象徴的な対象がない。たとえば「戦後日本」だったら、憲法とか丸山眞男とかが象徴になる。六〇年代だった

ら、六八年の学生運動を書く、ということになる。でも八〇年代以降の日本を象徴するものはと考えると、小泉政権とかオウムとか言っても、あまり全体を象徴しているように思えない。そう考えると、「代表」とか「象徴」とかいうことが成立しないのが現代かなと思つたわけです。そういう「代表制」が成立しない時代に入っているという認識が、『平成史』や『社会を変えるには』のメインテーマですね。だから『平成史』では、象徴的な事件とか人物を追うのではなくて、社会構造の転換から日本の集合的意識の変遷を描きました。

ただもちろん、震災と原発事故の影響はありましたよ。一番考えたのは、日本国はこれから立ち行くのかということでした。物理学を学んだこともあるので、原発事故の時は、何が起きているのか自分なりに把握できました。信頼のおける専門家の意見を聞いても、これは相当まずい、下手をすると東京圏まで避難ということになりかねない。東京圏が避難になれば、人体への害がどの程度あるかは別問

題として、経済も政治機構も崩壊しかねない。大混乱になるし、そうなればどこで仕事を探すのかということまで一応考えました。

幸い、そこまでの事態にならずに済んだわけですが、そんな事故をもたらす構造は許し難いと思いました。またその後の経過を見るに、日本は相当に制度疲労が来ているなと感じた。思想史とかよりも、社会構造に関心が向かっていったのは、そういう理由もありますね。

インターネットと言葉

——先生が一九九五年にデビューされてから来年で二〇年になります。この間にインターネットが普及し、出版以前に、言葉や情報をめぐる環境が大きく様変わりしたと思えますが、先生が特に注目されることはございますか。

私の意見では、インターネットは社会の変化や欲望を反映する道具に過ぎない。関心が個別化したり、関係が細分

プシケ

他なるものの発明I

ジャック・デリダ
藤本一勇訳

脱構築思想の「政治的-倫理的転回」を告げる。

A5判 本体9500円 [全2冊]

戦後日本 公害史論

宮本憲一

公害問題の歴史的教訓は何か。関係者必携の書。

A5判 本体8200円

岩波現代全書

環境の経済史

—森林・市場・国家—

斎藤修

悲観論とも楽観論とも一味違った比較環境史。

四六判 本体2100円

薩摩・朝鮮 陶工村の 四百年

久留島浩・須田 努
趙景達編

いま明らかにされる薩摩焼
発祥の地の歴史。

四六判 本体3600円

関東大震災と 中国人

—王希天事件を追跡する—

田原洋

渾身の取材で、その真実に迫る。

[岩波現代文庫] 本体1180円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
(定価は表示価格+税)

<http://www.iwanami.co.jp/>



化していくことは、インターネットがなくても起きたでしょう。そういう社会の要求がまずあって、それに沿って技術が発達し、傾向が加速したのだと思います。通信技術は別の使い道だってあるのに、なぜインターネットのような使い方になったのかといえば、それ以外の答えはない。

私個人に関して言うと、ネットの発達で、大変便利になりました。古本や資料を探すのも、注文するのも楽になったし、しかも安く手に入る。昔は国会図書館で、行列に並んでコピーしてもらおうしかなかった資料が、オンラインで入手できる。また原稿を書く時、当時の首相は誰だったかとか、法的にこの記述は間違いないかとか、簡単に調べられるようになった。だから年相応に体力が低下しても、もう少し仕事ができるかなと思います。その意味ではごく助かっている。

ただもちろん、弊害もあるだろう。インターネットの発達によって人間の可能性が広がるのかどうかについては、さまざまな研究があります。定説はまだないようですが、ほぼ共通見解なのは、いわゆる「マタイの法則」と言われるものです。富める者はますます富み、貧しき者は衣まで奪われるということです。つまり、もともと目的が明確で、能力や人脈もある人は、インターネットで可能性がどんどん広がる。そうじゃない人は可能性も広がらないし、かえって弊害が多く出るといえます。また可能性のある人がある人どうしで世界的につながるけれど、逆の集団もで

きていく。これは島宇宙化とか、格差の拡大といったこととパラレルです。

出版状況について言えば、ある種の「敷居」が崩れましたね。九〇年代の前半までは、書いたことを活字にするというの、かなり特殊な行為であって、書く側も載せる側もそれなりの水準を求めたと思います。九〇年代の末頃から、ほとんど内輪のブログみたいな文章が、そのまま紙の雑誌に載るようになり、事実関係の確認すらあやふやなもの、平気で垂れ流されるようになりました。

こう言うと、ネットの台頭で言論の質が落ちたという話になりやすいのですが、これは紙かネットかという問題ではない。ネットに詳しい人からよく聞く話に、「昔のネットは良かった」というものがある。「二〇〇〇年代初めの2ちゃんねるは質が高かった」とか、最近だと「初期のツイッターは良かった」とかね。でも調べてみると、「初期のツイッター」と言われる時期は、ユーザー数が五〇万人くらいだった。それが三〇〇万とか五〇〇万くらいになる

イラク戦争は民主主義をもたらしたのか

ドッジ 民主制度は構築されたが政治は腐敗と暴力の渦中に。情勢悪化の原因を示す信頼の書。山岡由美訳 山尾大解説 ¥3600

自閉症連続体の時代

立岩真也 発達障害、アスペルガー症候群、ADHD...という「連続体」はどう社会化されたのか。ともに生きる方法を探る。¥3700

〈科学ブーム〉の構造

科学技術が神話を生みだすとき
五島綾子 科学技術への盲信を煽り、科学不信や利権の源泉となるブームがいかに仕掛けられ幕切れるかを詳かにする。¥3000

英語教育論争から考える

鳥飼玖美子 「英語教育大論争」の検証から教育改革の行方を考える。小学校英語、TOEFL 導入、英語公用語化? 緊急提言。¥2700

ジャッキー・デリダの墓

鶴飼哲 没後十年、悲痛のうちに綴られた論考から構成。師との友愛、後期作品の読解、デリダ的思考の実践。瞠目の書。¥3700

寝そべる建築

鈴木了二 立原道造が切り開いた地平を示す表題作、「ル・コルビュジェのメディア戦略」ほか「建築暮年」以後への応答。¥3800

世界の見方の転換

1 天文学の復興と天文学の提唱
2 地動説の提唱と宇宙論の相克
3 世界の一元化と天文学の改革
山本義隆 『磁力と重力の発見』『一六世紀文化革命』につづく近代科学誕生史(三部作)完結篇。[全3巻]①②各¥3400③¥3800

東京文京本郷
5丁目32-21 **みすず書房**
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税別)
http://www.msuz.jp

と、ある種の質的変化がおきるのは当然です。「ここに書くのだったら、このくらいの知識は持っていて当然」という共通規範を共有している社会が、それを共有しない人たちが参入して崩れてくる変化です。だから、問題は紙かネットかではなくて、「活字にして公開するのならこのくらいの水準は必要」という規範が、ネットの発達で誰でも活字を書けるようになって崩れた、ということでしょう。紙の総合雑誌でも、質の低いものは著しく低くなりましたね。いわゆる「ネット右翼」と言われる現象も、その一環だと思います。日本全体の右傾化が急激に進んだという印象は、半分は当たっていても、半分は可視化されただけだろうと思う。内輪の会話や、それこそ「便所の落書き」のレベルではいくらでも書かれていたような差別的な文章が、インターネットによって可視化されるようになった。誰もが書けるようになった、ということでしょう。こうした変化は良いも悪いもなく、それを踏まえて対処するしかないでしょうね。

出版の行方

——出版の世界は、二〇一四上半期の書籍の販売金額が対前年比五・九%減(出版科学研究所と、ますます厳しい状況に置かれています。その辺について先生はどうお考えでしょうか。

出版業界に関して言うと、申し訳ないですが、落ちるのは当然だと思います。二〇一二年に文化庁のシンポジウムに呼ばれて、なぜ漫画とアニメが日本でだけ大人にも読める水準にまで発達したのかについて、産業的な側面から述べたことがあります。煎じ詰めて言うと、一つには高度成長期に出版産業が異様に肥大化したこと。二つ目は後発近代国家だったので、教養神話が強かったことです。

面白い資料なので何度か引用してきましたのですが、一九六八年に、最近三ヶ月であなたが体験したレジャー、娯楽を挙げてくださいというアンケート調査がある。一位は「読書」でした。ちなみに二位は「一泊以上の旅行」、三位が「手芸・裁縫」、四位が「自宅での飲酒」、五位が「映画・演劇鑑賞」です。全体に、いかに慎ましい国であったかよくわかりますが、一位が「読書」になるところが少し珍しい。識字率が異様に高い発展途上国だったんですね。ロシアが比較的日本に近かったですけど、一般的に発展途上国は識字率が低くて本を買うのは知識層に限られ、部数も少ないから値段も高くなる。ところが日本は、庶民までが教養書

を読み、出版産業が異様に大きくなった国です。

ただしそれは、必ずしも教養書をみんなが読んでいたことを意味しない。日本では六〇年代から、新築の一戸建てを持つと、誰もが戦前の中産階級に憧れて、シャンデリアやソファ、ピアノやゴルフクラブを買った。そして本棚を作って百科事典を置く。もちろん読みません。しかしそれによって、出版産業は高度成長期に膨れ上がりました。それを支えたのは、識字率がやたらと高い、教養主義志向のある発展途上国だったという、一時期だけの社会条件です。

今から考えると、哲学の本が売っていたなんてことは、おかしなことでしょう。おそらく純粋な学術書はそれほど売れなくて、売っていたのは学術書めかした教養書の方でしょうが、それだって予備知識がないと読んでもわからないものが多かったし、実際に読まれていたかは疑問です。

趨勢としては、細切れで軽く読めるものからネットに移行していくし、すでにそうなっています。いまは雑誌と実用書がネットに食われていますが、次は漫画とライトノベルでしょう。学術的な教養書やベストセラー本も減っていますが、これは恐らく別の要因です。読みもしない百科事典や、読んでもわからないニュー・アカデミズムの本を買っていた人たちは、もう六〇代以上になっています。だんだん購買力も、購買意欲も衰えて、俳句の本とかガーデニングの本にしようという人が増えるのは当然のことです。ベストセラーと呼ばれる小説でも、買っても実際に通読

する人は、三割くらいだといわれます。本を買ったけど読まないという人は減り、実際に読む人だけが買う形になると思います。配信の電子図書では、話題だからとりあえず買って「積読」ということは少なくなる。そうした流れが教養書やベストセラー本に響いてくるでしょうね。

——先生、何かポジティブなメッセージをいただけますか（苦笑）。

これは時代の流れで、避けようがない。先進諸国はみんなこの流れですよ。私が最近の本で言っているのは、「あれは一時の夢だと思ってもう諦めてください」ということです。建設業界や原発業界の人にも、それを言うわけです。身の丈に合った理想像を真剣に考えてくださいとね。過疎地の人が、渋谷みたいになる未来像を描いていたら、「それは諦めたほうがいい」と言うのが親切というものです。それに、他国に比べれば、日本はまだまだ本が強い方です。

この基盤が生きているうちに、現実的な対応を考えるしかない。

実際に読まれるものしか売れないのなら、めざす方向はむしろ明確です。業界内で確実に売れる本か、業界の外も対象にできる普遍的な本か、二つに一つしかない。前者なら一冊二万円で売れるべきです。普遍的なものを目指すなら、書き手も編集者も、業界以外の人が読んで面白いが、まずは自分の胸に手を当てて考えてみることでと思います。

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』はピュリッツァー賞を受賞しましたが、アメリカでのダワーは、日本研究などという、ごくごく地味な領域の研究者です。なぜそんなマイナーな研究領域の本が、一般的に評判になったのかについて、日本語版の「まえがき」に、当人はこう書いている。これは日本のことを書いた本ではなく、人類に普遍的なことを書いた本だからだと。そういう姿勢から学びたいですね。

新刊案内

柴田隆行 著

シユタインの自治理論

——後期ローレンツァン・シユタインの社会と国家
シユタインの国家学構想の特徴を解明する。

山内由理子 編

オーストラリア先住民と日本

AS判・三六〇頁・本体三〇〇〇円
先住民学
交流表象
日本にいる我々がアボリジニについて知るといふことはどういふことか、オーストラリア先住民と日本との繋がりの方から考える。

安川悦子・高月教恵 編著 A5判・一八〇頁・本体二四〇〇円

子どもの養育の社会化

——ハラダイム・マホジの女性に
女性の働く権利・子どもの「育つ権利」を軸に「子育て」のシステムをどう再構築するか、「養育の社会化」にむけての問題提起の書。

河上幸子 著

在米コリアンのサンフランシスコ日本街

——境界領域の人類学
在米コリアンは日本人街でどう暮らしてきたか、記憶や経験から描く民族／文化の境界領域で生きる人びとの生活誌。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

歴史を語り伝える言葉——「読む」から「作る」まで

尾方邦雄（みすず書房編集部）

たまにベストセラー裏話のようなものを見かけることがあるが、その手のものを信用する気になれない。一冊の本が出来上がるまでのプロセスを約めて言えば、「読む」「聞く」「頼む」「作る」の四段階しか存在せず、その他のことは編集の本質にあまり関係ないからだ。

翻訳書の企画立案・編集制作の場合はなおさらこの四段階があてあまるだろう。これがもし最初から日本語で書かれた本を出版する場合なら、本を出したことのない（ときには文章を発表したこともない）人と「出会う」「見つける」こともある。しかし外国で出版された本は、本のかたち（最近ではPDFの事例も増えたが）をまとって現に存在しているのだから、それを自分で読んでみて出版を決めるのが真つ当にして最短最良の方法だろう。それ以外の道は邪道と言われてもしかたない。

それはわかっているが簡単ではない。専門研究者でない

われわれ（人文書の編集にたずさわる者ぐらいの緩い意味）には、あるいは私には、机のまわりに洋書を文字通り積み上げて（大地震の直後はその多くを床に移動させた）、ある種の勘は身に付いたところで、それを「読む」だけの能力も時間もない。そこで頼りになるのが、書評をはじめとする情報から読み取れるその本の評価である。

ここではみすず書房で刊行した歴史書三点に例を取りながら、どのようにしてそれを知ったか、その後どうやって刊行に至ったかを振り返ってみたい。この三点を選んだ理由を敢えていうなら、著者の名が日本ではあまり知られていなかった本ということか。これがもし（昔はいざ知らず）ブローデルやカントロヴィッチのように物語者で世評の定まっている書き手の本を出すなら、現在時点での「株価」を見定め、適任の翻訳者に依頼しさえすれば、残る仕事は原稿の完成を待つことと出版までの校正作業だけで、苦勞

は訳者のものであって出版者にはない。古典の新訳（現代の「古典」も含めて）はコツさえ掴めば、むしろ「営業」が主な仕事なのではないか。ここでは三冊の本の企画提案に始まる「編集」の経験を書かせていただく。

一冊目は、ジャン・クロード・シュミット『中世の身ぶり』（みすず書房、一九九六）である。

シャルチエ、パストゥローと並ぶフランスのアナール学派第四世代の一人シュミットの名だけは目に入らなかったもの、もし「タイムズ文藝付録」の書評が目に入らなかったら（「読む」ことがなかったら）この本を見過ごしていたと思う。T L S 紙は英訳されていない著作についても平気で英文の長い書評を掲載する。手元がないので筆者は不明だが、細部にわたり具体的だったことを記憶している。中世ヨーロッパの教会彫刻や、書物の挿絵や細密画などに現れる人物の身振り（しぐさ）は何を表しているのか、往時には一目瞭然だったのに今では謎となった意味を解説しようとする研究書。原書を見たら、このテーマと参照例の量（と興味深い図版）に脳を刺激されてしまった。面白そうだが、どうすれば翻訳者を見つけて実現できるだろうか？

そこでまず、池上俊一さんに相談することにした。「さん」などと気楽に書いたが、存じ上げていたわけではない。彼は留学から戻ったのち、九〇年代に入って『動物裁判』などで注目の若き西洋中世史家で、こちらは単なる読者に過

ぎなかった。あの当時だから電話の前におそらく手紙を差し上げ、ともあれ横浜国立大学に行って初対面の研究室で明晰な説明を「聞く」ことができた。優秀な研究者に会うと、対象の本の姿がくつきり見えてくるだけでなく、著者が立っている場所が立体的にみえるとともに、日本における受容のされかたや新しい世代の研究者の空気を感じることもができる。ご本人はそろそろ忙しくなる頃合いで翻訳をお願いできなかったが、適わしい訳者として紹介されたのが、やはり一面識もない松村剛さんである。

こんどは東大駒場の研究室まで出かけ翻訳を「頼む」ことにした。見るからに秀才で、雑談など恐くて出来ないほどだが、この人ならシュミットの博搜にまったくひるまないだろうという感触があった。二年ほどかかったか、受け取った翻訳原稿は完璧なものでタイプミスもゼロ、ラテン語を含む諸言語の原注が、必要な日本語情報を加えてみごとに文字データとなっていて（ネットもパソコンも現在ほど活用されていない時代のことゆえ）驚愕した。編集側は組版や写真ページに多少の工夫をした程度で、用意した初校にも赤字はほとんど入らず（！）「作る」手間は限りなく少なかった。「頼んだ」ところで大方の仕事は済んでいたためか、『中世の身ぶり』についてはむしろ、本を差し上げた須賀敦子さんの病室のすぐ手の届くところに置かれていたことのほうが思い出されるほどである。

シュミットはもう一冊『中世の幽霊』も出した。引き続

き松村さんに「頼んで」いたが進捗せず、紹介された小林宜子さんに交替したところ、こちらも優秀な方で良い翻訳を刊行できた。紹介の連鎖ながら訳者に恵まれたシユミットともども、版元としても幸いなことであった。

ところで、書評を読み慣れてくると、何が書かれてあるかだけでなく、誰が書いているかに自然と目が行くようになる。音楽雑誌でレビューの中身や星の数だけでなく、誰が推薦しているかでそのアルバムを買おうと決めるのと同じ心理かもしれない。とりわけ恒例の「今年の収穫」のような欄は馴染んだ評者の名を探しながら目を通すだけで有益な情報を得られる。月刊「みすず」新春号の「読書アンケート」も、その種の関心に応えようと努めている。

さて、いつものようにT L S紙のそういう欄を「読んで」いたら、歴史学者のティモシー・ガートン・アッシュュが絶賛している一冊の本が目が釘付けになった。アッシュュの面白さと凄さは彼の自伝的な『ファイル』（みすず書房、二〇〇二）で体験済みだった。旧東ドイツの秘密警察をめぐると、これほど臨場感にあふれ厳密な本は他にないだろう。そのアッシュュがここまで言うからにはと思ふ、その *POST WAR* を手に入れたところ、一読三嘆であった。著者ジャットはユダヤ系英国人の碩学、波乱万丈の人生という大きな違いはあれど、私も戦後五〇年代生まれの端くれだから、育てられた環境についての記憶は、貧困の中の幸福、世界情勢

の緊張と緩和、新しい文化の到来、どれも共通したものである。登場する映画や音楽はほとんど頭の中で再生できる。これはいいぞと思っていたらピューリッツァー賞の最終候補になり、ジャットの名もそれまでに「ニューヨーク・リヴュー・オブ・ブックス」でたびたび見かけていたと気が付いたから、企画を急ぐことにした。

欧州の社会経済が専門の長部重康教授がたまたまニューヨークに滞在中だったので現地での評判を「聞く」と、町の書店でも好評でありまことに面白い本だと教えてくださった。しかし九六〇ページの大冊である。もし大学の先生に「頼んだら」出版はいつになるかわからない。たどり着いた訳者が森本醇さんであり、これが大正解だった。書籍編集の先輩でもある森本さん（ジャットより少し年長）とは、原稿完成までのスケジュールを綿密に打ち合わせてスタートした。のみならず、当方の手間を配慮してくださった本文構成（原注も訳注も傍注として入れる）や、索引作成に至るまで膨大な努力を傾注してくれた。原書の全体を省略することなく、しかも日本の読者に必要な情報を加えつつ、翻訳文のスタイルをはじめとして読むのに不要な労苦を強くないような設計。まさに訳者と編集者の二人で翻訳書を「作る」という充実した経験となった。

こうして出来た上下巻一〇〇ページ超のトニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』（みすず書房、二〇〇八）は今でも版を重ねている。日本では初めての著者だったので、本

書の評価を最初に「聞いた」長部さんに、ジャットを紹介する日本語解説を寄せていただいた。同世代の専門研究者としての共感と批評に満ちた力作である。刊行後は、岩間陽子、姜尚中ら諸氏の新聞書評でも絶賛され、ゆっくりと読者を増やしていった。その後ジャットは難病と闘った末に亡くなったが、『荒廃する世界のなかで』『記憶の山荘』私の戦後史』もみずす書房から出版した。

ジャット最後の遺著といえる『二〇世紀を考える』は、若い東欧研究者ティモシー・スナイダーとの共著である。ALSで日毎に全身の運動能力が衰えてゆくジャットの自宅で、スナイダーは先輩歴史家の高密度の談話を聞き、とき期的確な質問を放ち、その日のうちにワープロで文字に起こした。それをジャットに読ませて修正をしてもらい、自らも補筆して本文を書いた。ジャットの『二〇世紀を考える』(内容は前記の三冊を一つに集約したような本となった)も、小社から近刊の予定である。ちなみにここで優れた聞き手となったスナイダーの評判の著書『赤い大公』はこの

春に慶應義塾大学出版会から刊行された。スナイダーは大部の主著 *Bloodlands* もいずれ日本で出版されるだろうし注目されるべき歴史家の一人である。

最後に「作る」のにいささか苦労した話をしたい。三冊目は、ジョン・ルカーチ『歴史学の将来』(みずす書房、二〇一三)である。

きっかけは『ヨーロッパ戦後史』と同じくTLSのアンケート。挙げていたのはジョージ・スタイナーで、高齢の歴史家がこれだけとはいうことを書いた本であり感心したというような彼にしては珍しく率直なものだった。白水社からかなり前に出た『ブダペストの世紀末』の著者として知るのみのルカーチだったが、法政大学出版局から『評伝ジョージ・ケナン』が翻訳刊行され、ちょうど書評を新聞で読んだばかりだったので引つかかったのかもしれない。原書は大学出版から出ているので地味な本だろうと踏んで取り寄せた本を「読み」出したら意外や、薄い本で大き

「報道写真」と
戦争一九三〇—一九六〇

白山眞理著
名取洋之助・木村伊兵衛・土門拳…

その写真は、報道か？
宣伝か？
向き合うは、体制か？
大衆か？

4800円



戦合篠長 検校

平山 優著 今一度、史料と向き
合い、諸問題を徹底検証！ 戦合
の真相に迫る話題作。【忍ち2刷】
(歴史文化ライブラリー) 1800円

靖国神社と 明治国家の
幕末維新の祭神たち [英霊]創出

吉原康和著 志士の合祀過程を、
維新の勝者と敗者の視点から探
り、祭神の実像に迫る。2300円

二・二六事件と 簡井清忠著
青年将校 2600円

果たされなかった昭和維新。一
彼らの颯起はなぜ失敗し、敗者と
されたのか？ (敗者の日本史)

戦争に隠された
「震度7」 1944 東南海地震
1945 三河地震

木村玲原著 地元新聞社の知られ
ざる報道追跡と、被災者たちの体
験談を紹介！【2刷】 2000円

消された 田中宏巳著
マッカーサーの戦い 2800円

日本人に刷り込まれた(太平洋戦争史)
戦争史編纂をめぐる日米双方の問
題点とともに検証し、呪縛を解く。

首相になれなかった
男たち 村瀬信一著

井上馨・床次竹二郎・河野一郎
不運の物語から見えてくるトップ
・リーダーの姿！ 3200円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151 / 価格は税別
2014年版「出版図書目録」送呈

めの活字だから、英語とはいえ早く進む。書いてあることも先述の二冊のような膨大な細部は無いので素人にも了解しやすい。ヒストリーという言葉の原義から始まり、歴史を職業とする専門家の登場から大学における専門研究者の誕生と増加、そして小説と歴史の相互乗り入れ、出版界における歴史ブーム、さらにここ数十年間に進んだ歴史学の衰退と危機……などなど、日米の程度の違いは当然にしても類推できるようなことばかりが、真摯かつ頑固なユーモアで書かれてある。飛ばしながらにせよ読み切って、どこぞの新書で出されたら「今年のベスト新書」は間違いないのになあ、とまで思い込んだ。

念のため専門家の意見を「聞いて」みよう、東大本郷の近藤和彦教授の研究室まで歩いて本を持って行った。「読んでみてください」と「頼んだ」ときの笑顔での応対から脈はあるかと感じはしたが、日を置かず近藤さんから丁寧なコメントをいただいた。この本の長所も短所も指摘されて（短所とはたとえば日本における歴史研究についての無知など）、出版の意義はあると励まされたので、刊行の折のご協力をお願いして、企画実現に取りかかった。

そこで『ミル自伝』の経験から頼れる翻訳者・村井章子さんに「頼む」ことに決めた。故山岡洋一さんを引き継いで、アダム・スミス『道徳感情論』の新訳中であったが、引き受けてくださった。翻訳は無事に仕上がりに、初校を近藤さんに見せて解説を「頼んだ」ところまではよかったが、

ここで困ったことが生じたのである。

解説者から返されたゲラが真っ赤になっている。典型的な一例を挙げれば professional historian を村井さんは「職業的な歴史家」、近藤さんは「専門的な歴史家」と訳すべきだという。old-fashioned は「旧弊な」に対して「古風な」とニュアンスが異なる。science は「科学」なのか「学問」なのか。綿密に読んで下さった近藤さんから、専門知識や教育制度について教わる場所は少なくなかったが、ここでの訳語の選択は、英語と日本語の語義と語感による解釈の問題にかかわる。双方の立場の相違や、ルカーチという著者の性格をどう見るかにもよる。書名の *The Future of History* からして「歴史の未来」か『歴史学の将来』か？

間に挟まった編集担当として行司役をとめることもままならず、行文の二々をたどりながら時には第三の訳語を捻り出したりして何とか刊行まで漕ぎ着けた。お二人への揺らがぬ信頼があればこそ可能だった作業である。幸い当方への信頼も失わずに済んだようで、近藤さんによる解説の最後に謝辞をいただけた時にはホッとした。

「頼んだこと」「作ったこと」を悔やみたくない。そのために「読むこと」「聞くこと」を重ねてきたというのが掛け値のないところで、しかもここでの三例のきつかけは TLS 紙に限られて新味はないが、訳者たちへの感謝の念を込めた、ささやかな体験談で責を果たさせていただく。

特集＊言葉をつくる

ずらす言葉、うける言葉——シリーズ「ケアをひらく」を企画して

白石正明（医学書院看護出版部）

この九月に、シリーズ「ケアをひらく」の二八作目として『クレイジー・イン・ジャパン』を刊行した。サブタイトルは「べてるの家のエスノグラフィ」。このシリーズでずっと追っている北海道浦河町（うらがわ）にある精神障害者コミュニティ「べてるの家」を描いた本である。

著者の中村かれんさんは映像人類学者。ご両親も人類学者である。それもあってか、かれんさんはインドネシアで生まれ、オーストラリアと日本で育ち、やがて米国でアカデミックキャリアを積み、現在はイェール大学准教授の職にあるという文字通りグローバルな経歴を持つ方である。

この本では明確に記されていないが、かれんさんは実は日本があまり好きになれなかった。しかし二〇〇五年にべてるの家に初めて行ったとき、何かが変わった。その後二〇〇七年六月から翌年の一月まで七か月間にわたって再びべてるに向いた。そのあいだにご自身何度目かのうつ病を体験したが、セルフヘルプグループに参加しながら、つ

まりかれんさんは、べてるの家のメンバーに助けられながらフィールドワークを行ったのである。

その成果が本書である。これまでにない文脈でべてるの家を意味づけた本文はもちろんだが、付録のDVD「Bethel」は、一方でべてるコミュニティに巻き込まれ、他方で屈指の映像人類学者として覚めた目で記録しようとする意志が横溢した実に魅力的な映像作品となっている。

シリーズ新作について長々と書いてしまったが、それはかれんさんと同様、私もべてるの家に惹かれていたからだ。しかし、なぜそんなにべてるに惹かれるのだろうか。その理由を探るところから、自分がこのシリーズで何を目指してきたのかを考えていきたい。

「あれかこれか」から逃れる

べてるの家は、「精神病で町おこし」「偏見差別大歓迎」など、人を食ったようなキャッチフレーズで知られている。

毎年夏に開かれるべてるまつりでは、「幻覚&妄想大会」が呼び物となる。これは、その年の最もよい（＝最も多くの仲間をつなげた）幻覚妄想を表彰するものだ。

これまで幻覚妄想といえは、精神科医にとつてはまずは消すべきものだった。だから「声が聞こえるんです……」と言えばクスリが増える。患者が医者の前では容易に幻覚妄想について語らないのは、こんな理由があるからだ。

だが、べてるの家のソーシャルワーカー向谷地生良さんは、あるとき患者同士が自分たちの幻覚妄想をイキイキと語り合っている姿を目撃する。精神病とはそもそもコミュニティケーション不全の病であり、幻覚妄想はその症状である。しかし彼らは、当のコミュニティケーション不全症状にほかならない幻覚妄想を道具にしてコミュニティケーション不全ではないか！ そんな不思議なメカニズムに打たれた向谷地さんは、やがてメンバーと共に、幻覚妄想を「なくす」のではなく「使う」方向に足を踏み出していく。

幻覚妄想をなくすのではない。幻覚妄想があつて何が悪いかと訴えるのではない。良いか悪いかの文脈から離れて、いまここにある幻覚妄想を、コミュニティケーション・ツールとして使うだけだ。そのとき「幻覚妄想」という言葉は、これまでにないやわらかさを纏うだろう。

言葉の内実を変える

「幻覚妄想は医療用語だから、当事者は使うべきでない」

と言われることがある。それはたしかに潔いが、となると、真面目にやればやるほど使う言葉が減ってくるのではないか。何か不自由な気がする。それよりも、現在ある言葉を否定したりなきものとせず、適当にずらして使つて言葉の内実そのものを変えてしまうという戦略もあるのではないか。

上で紹介した『クレイジー・イン・ジャパン』の中で、その死が印象的に語られている中山玄一さんの自己病名は、「統合失調症内部爆発型発熱タイプ常時金欠状態」である。ツボは、「統合失調症」という医師から与えられた病名と、「内部爆発型……」という自分オリジナルの特徴を組み合わせたところにある。

統合失調症を否定してしまうとあとで手痛いしつぺ返しを食うというのが、病気の先輩たちが身をもって教えてくれることである。だから少しおだてる感じで、病名の最初に持つてきてあげればいい。幻聴も同じで、それを否定すると余計うるさくなる。だから「幻聴さん」とちよつと持ち上げる感じで、めんどくさい近所の兄ちゃんと同じくあうくらいがちょうどいい。

威勢のいい「反」はしばしば、反対する対象物を「反対するに値する」ものとして逆に高く評価してしまっていることがあるように思う。「反」精神医学は、精神医学を身のほど以上に価値づけてしまっている。

そこで『当事者研究の研究』の編者、石原孝二さんは「半」

精神医学」という表現を使った。既存の軸からは、正と半の成分比が半分ずつのようにしか見えないということである。精神医学の側からも反精神医学の側からも不徹底さが指摘されるべてるの家にふさわしい表現だと思う。しかし本当は、べてるの家で行われていることを表現するには、あるいは「ケアをひらく」に登場する人々を表現するには、もっとピントの合う、別の軸が必要なのだ。ではその新しい軸はどこにあるのか。

私にとって、その問いを共有してくれるのが、「著者」という存在である。著者からの回答が、すなわち「本」である。……と、エラそうに書いてしまったので、以下慌てて言い直すことにする。

分母を問わざるを得ない人たち

問題が設定されて「これってな〜んだ」と問われると、さっぱり頭が働かないタイプの人がいる。というか私がそのなのです。先の例でいえば、「精神医学」という軸のなかで、べてるの家を位置づけよ」と言われると、なんでそこで精神医学が出てくるのかうまく理解できない。分母と分子があったら、問いはいつも分母のほうに向いてしまう。つまり一言でいうと勉強ができない人なのだ。

でも、分母に問いが向くにもかかわらず、私と違って頭が働く人たちがいる。あるいは働かせざるを得ない人たちがいる。

第一に、もともと頭が働くにもかかわらず、少数派として生きざるを得ない事情があつて、多数派の問題設定に乗れない人たち。『リハビリの夜』の熊谷晋一郎さんがその代表かもしれない。熊谷さんは脳性まひで身体は自由に動かないが、東大医学部に現役で受かった。身体が動かないから頭の中で数学の問題を解くのが趣味だったと聞いたときは、この人はETではないかと思つた。

第二に、恣意的に選択されたにすぎない分母を前提にして物を考えること自体に意味を見出せない人がいる。つまりドウルーズによる哲学の定義「新しい概念をつくる」そのままの人たちだ。いま小社看護出版部のウェブサイトで「かんかん！」で、「イエスだったらどうするか」を書いていただいている大澤真幸さんや、雑誌『精神看護』で「中動態の世界」を連載中の國分功一郎さんがそうかもしれない。そして第三に、与えられた問題設定では生きられないから、自分で勝手に問題をつくって勝手に生きるという、べてるの家のような人たちがいる。独特の問題設定のなかで生きていくから、その解も解法もいつも独特だ。

しかしこのような特殊な環境や特殊な才能をわざわざ挙げなくてもいい。もっと普通に、たとえば何十万人もいる看護師さんをはじめとしたケアを職業とする人たちも、「治す」「回復させる」という常識的な「大分母」を問わざるを得ない人たちである。

看護師の言葉がわからない

私はむかし福祉系の出版社にて、入社してすぐに地方の編集部に行き、そこで一〇年以上校正の仕事に携わっていた。それなりに面白かったが、何かもつと生き生きとしたことがなくて出版社に入っただけだった。端的に言えば「企画」といわれるような仕事をしたかったのだが、何をどう企画していいのかわからなかったし、だいいち人前に出て自分の企画を語るような機会も勇気もなかった。

あるときひょんなことから——同期からずっと遅れてだが——東京の企画部に配転が決まった。うれしかったが何をしていいのかわからなかった。とりあえず以前少し関わったことのある看護の本をつくろうと思った。福祉系出版社だったから、看護の本なんて傍流だから何をやってもしられないだろうと思ったわけだ。

さて、取材で出会った看護師さんたちの話は面白かった。医師の補助者とか、あるいは逆に「献身」といった文脈では理解できないような、患者が生きていることを素手でガツツとつかんで応援してくれるような感触があった。

二〇一〇年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した川口有美子さんの『逝かない身体』に、ALSという進行性難病をもつ患者に対して支援者が、病が進行しても「これまで通りのケアを続けるからね」と約束する場面がある。あやがて痛みも感じなくなるだろうから「今が我慢やよ。あ

とちよつとで慣れるから」と風変わりな励ましの言葉を発したりする。これはなんとというか、不思議な話である。

「予防」という合理性の世界ではもちろんなく、やがてよくなるという「回復」の物語でもなく、ただ単にその後の経過に付き添う。そう宣言しているだけである。そのような形で自分を差し出す準備はできているとは言っているものの、具体的には何一つ与えることはできない。にもかかわらず、その支援者の言葉には、人が生きていくための必須栄養素のようなものが含まれているように思える。

実はそんな話は臨床にいっぱい溢れているのだ。だが、その必須栄養素ぶりが理解できない医療者も、これまたくさんいる。そして「情緒的だ」とか「もつと論理的に喋れないのか」などと、刺すような言葉を投げつけるのである。私にとってはむしろそれが衝撃だった。だって問われるべきは、それを受け取れない貧しい受信能力のほうだろうに。

受けるに享けるに向けて

では看護師さんは何をやっているのかと問われてもうまく答えられない。これが困ったところだ。たとえば、べてるの家のどこがそんなにいいのかを説明しようとしても、喋っているうちに、相手に「人間だもの」的ポエムに受け取られていることが伝わってきて舌が空回りしてしまう。

もしかしてこのシリーズでは、その表現の仕方のバリエーションを探してきたのかもしれないと、最近思うように

藤原書店

世界精神マルクス 1818-1883

J・アタリ グローバリゼーションとその問題性を予見していたのは、マルクスだけだった。今こそ可能となった、マルクスの実像を描きえた伝記。 嶋昭弘訳 4800円

闘争の詩学

民主化運動の中の韓国文学

金明仁 近代化の中で常に民主主義と文学を問い続けてきた、批評家の論考を精選。 渡辺直紀訳 3200円

書簡で読み解くゴッホ

逆境を生きぬ力

坂口哲啓 悲しむ者、虐げられる者への共感と愛——真の人間を描きぬいたゴッホ絵画の奥深さ。 2800円

時代が求める後藤新平

自治/公共/世界認識

100人を超える各界識者が描く後藤像。 粕谷一希/菊部直/養老孟司/佐藤優/鶴見俊輔ほか 3600円

粕谷一希随想集2 (全3巻)

歴史散策

日本近現代史をどう見るか。(推薦) 塩野七生/半藤一利/陣内秀信/福原義春/解説/富岡幸一郎 (月報)加藤丈夫・清水徹・水木楊ほか 3200円

◎「見えないものを見る」ためには？

学芸総合誌
季刊

歴史的
環境
文明

vol. 58 2014年夏号

(特集)「匠」とは何か

永六輔/石牟礼道子/宮脇昭/大沢丈夫/奥田瑛二/櫻間金記/松本遊人/神崎崇峰/吉岡幸雄/結城幸司/松居竜五ほか

(シンポジウム) 岡田史学とは何か 岡田英弘/田中克彦/倉山誠/宮脇淳子ほか (寄稿) 嶋昭弘/山下寛久/山田國隆ほか (連載) 川勝平太+木庶佑/金子兜太/小倉紀蔵ほか 3600円

月刊
機

B6変32頁 8月号 No.269

高銀/立花英裕/小倉和子/新保祐司/臼井隆一郎/榎本隆充/岡田英弘/宮脇淳子/加藤晴久/尾形明子/山崎陽子/大沢丈夫/一海知義ほか

年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド呈 *表示価格税別

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523 振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301 ホームページ <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/>

は見えないうりフトの裏側には、たくさんの家族写真が貼られている。「受ける」……この豊かさといつてもいい。ここでふたたび、『逝かない身体』から一文を紹介したい。台風による暴風雨が迫る未明、ALSを一二年間生きたお母様が亡くなった。それから告別式の日まで、著者の川口さんは暇さえあれば使っていた介護用ベッドに寝転がり、母親が一二年間見てきた光景を見て過ごした。立っ

生を享受するところから発せられる言葉には不思議な美しさがある。その美しさを受け取れる人たちは、きつとその言葉から、現実的な力をも受け取っているはずだと私は思う。

ている。「受ける」……この豊かさといつてもいい。ここでふたたび、『逝かない身体』から一文を紹介したい。台風による暴風雨が迫る未明、ALSを一二年間生きたお母様が亡くなった。それから告別式の日まで、著者の川口さんは暇さえあれば使っていた介護用ベッドに寝転がり、母親が一二年間見てきた光景を見て過ごした。立っ

生を享受するところから発せられる言葉には不思議な美しさがある。その美しさを受け取れる人たちは、きつとその言葉から、現実的な力をも受け取っているはずだと私は思う。

た例えば『弱いロボット』(岡田美智男著)では、自己完結しないことの豊かさを、『坂口恭平 躁鬱日記』(坂口恭平著)では躁鬱病を治すことを諦めてむしろ一つの技術として使う試みを、あるいは『驚きの介護民俗学』(六車由実著)では他者の話に驚けることがいかにすごいことなのかを語っている。総じてこれらは、その人が何事かを為すのではなく、その人自身が何事かが起こる場になっていることを描いている。「受ける」……この豊かさといつてもいい。

付けてあった。こうして母の気持ちになり寝たままの生活を体験してみると、ベッドの周囲から外の世界の広がりまで感じられ、それぞれがバラバラに動き回っている。身体の外で起きていることを受信するだけでも忙しい。「いつも同じ天井ばかり見ていられて幸せだった」そんな母の声が聞こえるような気がした。

特集＊言葉をつくる

学術書編集の技法——大学出版部の十年目に思う

山田秀樹（東京大学出版会）

振り返れば早いもので、大学出版部のひとつである東京大学出版会に入社して、十年を終えようとしている。それまでも学術出版社の編集職として働いていたが、比べてみると、大学との結び付きという点において、大学出版部は特有の性格を持ち合わせていると思う。

節目を迎えるこの機会に、大学出版部の学術書編集、とりわけ企画立案に際し、日々の活動のなかで感じてきたことを述べてみたい。

学術書の魅力

自分が読んでみたい、他人に読んでもらいたい企画を構想して練り上げる。書き手が紡ぎ上げた言葉の最初の読者として感想を投げ掛け、時には編み直し、時には整形する。本としての形を与え、見知らぬ読者に向かって送り放つ——「編集」を短く言い表すならば、このようなものだろうか。作品が雑誌であれ書籍であれ、非売品であれ市販品

であれ、大手出版社のものであれ一人出版社のものであれ、行われる編集作業は基本的に同じである。

では、そのなかで、学術書編集の特徴は何だろうか。

当然のことながら、学術書とは学術の成果を書物に取り纏め世に問うものであり、学術とは、事象の分析・考察のなかでもっとも深層に位置する営みである。

時流の話題につき、短い字数のなかで自身の見解をストリートに伝える場が新聞や雑誌であるならば、必ずしも時流の話題に限ることなく、教養読者層に向けて分かりやすいテーマを立体的に伝える場が新書や選書だろうか。一方、時間を掛けた調査のもと、厳密な論証に耐えられる論点に絞り込み、深く掘り下げた議論を伝える場が学術書である。

書き手には執筆の「引き出し」がいくつもあり、それぞれの媒体に応じて、それらの「引き出し」を使い分けている。瞬発的なセンスと切れ味が求められるジャーナリズム

の対極にある学術は、持続的な調査と細密な論理が求められる。したがって、その成果としての学術書の編集は、持続的に掘り下げられ、選り抜かれた言葉と向かい合い、まだ見ぬ読者に向けてそれらを洗練し、本としての形を与えることでもある。「自己の全心を打ち込んで、たとえばある写本のある箇所の正しい解釈を得ることに夢中になる」(マックス・ヴェーバー) 成果に触れ得る学術書の編集は、物事を突き詰めて考える読者に対し、ことのほか深く静かな感動を与え得る仕事なのだろう。

学術書の企画

その本づくりへの起点となる企画立案は、編集者がアイデアを自由にめぐらせ創意工夫を発揮できる、もつともワクワクする瞬間かもしれない。戦後日本の出版に豊かな恵みをもたらしてくれた編集者・小尾俊人さん(一九二二—二〇二一年)は、編集とは「出会い」だと言う。

編集は出会いである。出会いからはじまるネットワークづくりが編集作業になる。それは単数が複数に、個人が集団に転換する、いわば生物現象にも似た社会現象といえよう。……出会いのきっかけをつくるもの——それは人であり、本であり、社会であり、国であり、あるいは勢い、また空気である。それらのつくる偶然の組み合わせが、混沌を秩序へと方向づけてゆく。

それが成功したばあいに、世界のなかに「本」という名の新しい「モノ」が生み出されるのである。(小尾俊人「本が生まれるまで」)

企画もその「出会い」から生まれるわけだが、学術書の場合、雑誌や一般書の企画立案とは様相を異にするかもしれない。「企画」と聞いてイメージされる編集活動は、時局への感度鋭い編集者が、自らのアイデアや構想を結実させるべく、相応しい書き手を探し、原稿を依頼するという能動的なものであろう。

ところが学術は、編集者のアイデアでは決して左右されない堅牢さを備え、時間を掛けた研究が少しずつ折り重なっていく世界である。深く漏れなく分析される以上、その成果の発酵までには時間を要する。そこで求められる編集者の技量は、才気煥発なアイデアというよりも、発酵を粘り強く待ち続ける根気なのかもしれない。

とは言え、ただ座して待つだけではない。どのような研究者が、どのような研究を行っているのか、日頃の対話や文献調査を通じてつくりあげた全体図を頭に叩き込み、そのデータを常に更新していく。出版への道のりが長年に及ぶことも覚悟して、書き手とテーマを温める。そして研究成果が発酵するとき、言うなれば熟柿がポトリと落ちようとするとその瞬間、取り逃すことのないよう収穫するのである。この持久走の伴走こそ、学術書編集の特質と言えない

だろうか。

企画化の条件

成果の収穫期となれば、ネットワークのなかから生まれた必然の原稿であれ、偶然の原稿であれ、その是非を判断する際にはじめの問い掛けがある——それは面白いのか？ 学術的に確かか？ 自分がつくりたい本か？

編集者自身が面白いと興奮し、その魅力を贈り届けたいと思うからこそ、輝きのある作品が生まれる。竹中英俊さん（東京大学出版会）や橋宗吾さん（名古屋大学出版会）が言うように、編集はとことん惚れ込む「偏愛」であって良いし、それは二〇世紀を代表する編集者トム・マシユラーさん（一九三三年——）が力説するところでもある。

申し分のない本を出版するには、作品そのものの利益のために、出版人はその作品にほれ込んでいなければならぬ。わたしがそうした状態になつているときは、かならずその作品について細心の注意をはらっているはずだし、細心の注意をはらっているときは、かならずその作品の質の高さに感激しているはずで、これがわたしの唯一のやりかただ。どの作品を出版するかが決まると、ひとつの仕事がはじまる。まず、出版を決めた者が確信したことを出版社の人間全員に伝染させ、それから世の中にも伝染させる仕事だ。（トム・

マシユラー「パブリッシャー」

一方、学術出版、とりわけ大学出版部は、書き手と読者だけに向き合っているのではない。もうひとつ、「大学」とも向き合っているのである。大学の研究・教育成果を、出版を通じて広く社会に還元することは、大学出版部の存在意義のひとつでもある。ところが、大学という知の拠点から生まれる研究成果は、私たちの知的資産をさらに豊かなものへと導くものの、そのほかの出版とは異なり、販売部数・売上利益のみを企画採否の判断基準にできない難さを抱えている。

もちろん、学術書のなかには、専門的な内容であれども、その奥深くに広がる新たな発見に魅せられ、期待されるだけの販売部数を達成する作品もある。ただし一般的には、専門性が高まるほど、読者が限定され期待値に届かないことが多い。

「期待される販売部数」は、出版社ごとに、また作品ごとに異なるだろうし、研究・教育成果の公開という大学出版部の存在意義を鑑みるならば、採算や経済合理性のみを基準とすべきでもない。

とは言え、最近の学術書販売を取り巻く厳しい状況を踏まえるならば、とりとめのないまま出版することもできず、組織運営上、何らかの方針を持ち合わせることも重要と思う。そこで私自身は、販売部数が期待値に届かないことが

予想される場合、以下の基準に照らし合わせ企画の採否を判断してきた。

- (1) 学術的に極めて大きな意義を有する作品か？
- (2) 将来に大きな仕事が可能でできる書き手か？
- (3) 以前に大きな果実をもたらした書き手か？
- (4) 大学との連携、大学の情報発信に重要な意義を有する作品か？

このなかには、大学出版部でなくとも、学術出版社であれば踏まえらるべき基準もあるだろうし、他方で大学出版部ならではの基準もあるだろう。また、私がひとつひとつの企画を検討するなかで何とはなしにつくりあげたものだけに、果たして適切なものかどうか分からない。ひとつひとつの企画の是非は、この「当てはめ」を行いつつ判断しているものの、個々具体的に検討するなかでの迷走も尽きない。

とは言え、学術出版が困難な時代を迎えているいまこそ、個々の原稿に真剣に向き合い、それぞれの位置付けを明確にしつつ判断を下すことが、いっそう厳しく求められているのではないだろうか。

編集の時代

メディアの進歩や多様化により書き手の情報発信が容易となり、大学のオープンアクセスが積極的に展開される現在、編集者や出版社は不要になるだろうとさえ言われている。だからこそ、編集者は原稿を見る眼をさらに研ぎ澄ませ、プロの技量を見せつけなくてはならない。

持久走の伴走にもなぞらえた学術書の編集だが、内容がさらに引き立つよう誘導し、順風を促す良きペースメーカーになるなど、できることは数多くある。読者・書き手・大学という三者と相対する大学出版部のやりがいと責任への思いを新たに、次の十年を踏み出したい。

白桃書房

情報通信の規制と競争政策

市場支配力規制の国際比較
岸井大太郎・鳥居昭夫編著
定価 4860 円

市場支配力に注目しながら欧米の情報通信分野の法規制を比較し、日本の規制の特徴や問題点、課題を整理。

日本人とCSR

遊戯・フロア体験・ダイバーシティ
潜道文子著
定価 4860 円

江戸・明治期の CSR 的な考え方を紐解き、日本企業がその特質を活かしながら、CSR を通じて競争優位を確立する道を追究。

学生主体のコーディング型教育

ゼミ授業で学生は成長する
松島桂樹著
定価 1890 円

ビジネスパーソンの経験も持つ著者が実践してきた、広く文系のゼミ・講義に使える、学生を巻き込む教授法。

Human Resource Management in the UN

A Japanese Perspective

Kazuko Yokoyama

Ed. Sarah Louisa Birchley 定価 2700 円
国際公務員を目指す留学生の方向け英文書籍。国際公務員へのヒアリング・統計調査からその働き方を考察。

東京都千代田区外神田5-1-15

TEL03-3836-4781 FAX 03-3836-9370
http://www.hakutou.co.jp

命の形 — 形の命

森

と海と太陽と空気、
大地があるから私は生きている
とれを取っても私は
生きることが出来ない

空気を吸って
水を飲む
食べて寝る
これが本来人間の姿

今日から私は真白い紙
何でも自由に書き込める

日が登り
日が沈む
時が刻む

石ころも
草花も
小さな動物も

風が頬を撫でる
デザインが心を撫でる

地球に生きる
私はそれを慈しむ

春と
夏と
秋と
冬が私をめぐる

私は今日から私の歴史を作る昨日までの私とは何かが変わっている筈の私

デザイナーは自然科学から
美しさの答えを見出してほしい
ゲーテの自然観察力がその事を教えてくれる
Johann Wolfgang von Goethe

他者を思い
デザインする
幸せな人生

デザインは人と人を結びつける
デザインは人と大地を結びつける
リボンを掛けて未来への贈りもの

この時間が激流であれば
やがて穏やかな未来がある

心をつかち合う

私の言葉と
君の言葉は
共振しあう
私のデザインと
それを受ける
君の心が
共振しあう
それが私の願い

デザインとは思いを形に置きかえる行為

私の心の半分は
他者の幸せを
願っている
友と語り
父母を思う
日常

デザインは芸術ではない
使われて始めて
その価値が生まれる

世の中

どう変わろうと
私は自分を
大切にす

変化しないものは
重要ではない

キレイ、カッコイイ、カワイイと言えば
誰もが半分納得してしまう
この言葉に的確な裏付けは無い

私は長く生きてきた、
全ての人に感謝したい
生きているうちに
言うておこう

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

第三二回日本・韓国大学出版部協会 同セミナーが開催される

八月二〇日からクワオシヨウオクソン権元淳会長ら一五名の韓国代表団を招いて、富山市（高志の国文学館）会議室で開かれた。主題発表は、成均館大学校出版部玄尚澈先生の「強要された変化なのか、能動的変身なのか」で、大学出版部は母体大学の付属機関であるという従来モデルから脱皮して、デジタル・マルチメディア書籍（立体的コンテンツ）が生産できる文化のハブになるべきであるという。これに対して角田光隆氏（東京大学出版会）は、日本では厳しい出版環境に起因するがゆえの「収益事業から補助事業へ」という大学出版部の（後退的？）業態改編もうかがえるが、一方では出版部と母体大学の信頼感に基づく「出会いなおし」が行われているとする。こうした出版部の集合化による新たなミッションの遂行、大学出版部協会の組織強化や拡張策、国際的発信などが進展して、これまでにない広範な変革や試行が行われている現況が報告された。続いて、電子書籍に関する石沢岳彦氏（東京電機大学出版局）と、シンポジウムの書籍化という永野祥子氏（京都大学学術出版会）のケーススタディ二題が報告された。

四日間の会期の後半は恒例の協会の夏季研修会で、まず今年が生誕百年ということによる、竹中英俊氏（東京大学出版会常任顧問）の「丸山眞男と戦後初期出版界」の発表があった。そのあと大阪大学出版会と東京大学出版会から企画と経営に関する力のこもった報告があり、各参加者には収穫の多い研修になった。

×月〇日

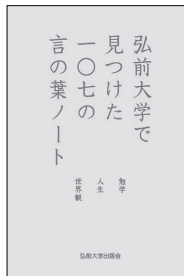
地下鉄の駅を出て後ろを向くと、坂がはじまる。わりと傾斜があつて、ほぼ一定の角度を保ったまま上へのぼっていき、上りきったところにメゾン萬六がある。あたりは神田の下町の喧騒を頭一つぬけた、まあ「坂の上の……」といった風情がないでもなく、悪くない。この坂、調べてみたら名前がついていた。中坂、というのである。九段坂と冬青木坂むらぎの間にあるがゆえの命名のようで、無名といえど無名、ただ往時は神田祭の山車がみな競ってこの坂から上っていったという記録がある。男性的な斜度（男坂というふうな）と直線性が好まれたためかとも見える。坂というのは逃走路だが、坂道を人生になぞらえた「長い坂」という長編もあつて、とにかく熟年の足腰には一人なのである。事務局が入ったメゾン萬六は、こういう所にある。

北海道大学出版会

- ▼秋月俊幸著『千島列島をめぐる日本とロシア』（四六判・二八〇〇円）日本とロシアの最初の接触から現在までの両国関係を、アイヌ民族をめぐるエピソードも交えながら、分かりやすく描いた通史。
- ▼呉人徳司・呉人惠著『探検言語学—こたばの森に分け入る』（A5判・三〇〇〇円）未知なる「土地」と「言語」への探検行を活写。シベリア北東端を舞台に、先住民族コリヤーク、チュクチの言語と文化を考察する。「フィールド言語学者」の仕事ぶりが生き生きと伝わる一冊。
- ▼櫻井義秀・飯田俊郎・西浦功編著『アンビシャス 社会学』（A5判・二〇〇〇円）大学教養教育・初学者向けの使えるテキスト。図表やコラムを利用して社会学の基本的概念をやさしく解説し、現代社会の諸問題を解き明かす。今後の学習に活かせる社会学のツールを提供。
- ▼A・A・パーリッG・C・ミーンズ著／森泉訳『現代株式会社と私有財産』（A5判・六八〇〇円）新訳決定版！株式会社社の「所有と支配（経営）の分離」として知られたI編に加え、II・IV編の多面的論点をも検討する訳者解説付。

弘前大学出版会

- ▼弘前大学出版会編『弘前大学で見つけた一〇七の言葉ノート 勉学 人生 世界観』（四六判・二二二頁・一〇〇〇円）弘前大学の様々な分野の教職員一〇七名が、それぞれ座右の銘や心に残る言葉を選定し、その言葉を選んだ思いや背景などを、随想（エッセイ）の形で紹介。



- ▼弘前大学大学院保健学研究科現職者研修実行委員会編『被ばく患者対応トレーニングマニュアル』（A4判・五二頁・一四〇〇円）現職の看護職者・診療放射線技師の研修に。準備から実践までを網羅。
- ▼李永俊・渥美公秀監修『東日本大震災からの復興（1）想いを支えに』（A5判・二四四頁・二八〇〇円）東日本大震災の経験を「聴き書き」の形でまとめた一冊。震災の瞬間、復興の実情、今も続く苦労や悲しみ、そして思い描く未来が見える。

東北大学出版会

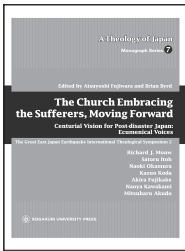
- ▼東北大学菜の花プロジェクト編『菜の花サイエンス—津波塩害農地の復興』（A5判・一三〇頁・一五〇〇円）東日本大震災による津波で塩害を被った農地を、「菜の花の科学」で復興に導く。微生物学・土壌肥料学・環境影響評価・植物遺伝学・育種学等、東北大学大学院農学研究科の多領域の研究者たちが一丸となって取り組んだ共同プロジェクトの軌跡。
- ▼堤憲太郎著『スイスと日本の近代化学—スイス連邦工科大学と日本人化学者の軌跡』（A5判・二九六頁・三五〇〇円）日本の近代化学確立に大きな影響を与えたスイス連邦工科大学（ETH）の歴史と、真島利行、朝比奈泰彦、柴田雄次ら明治末期にヨーロッパに留学した日本人化学者たちの姿を追う。
- ▼トゥルムンフ・オドントヤ著『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから』（A5判・二二二頁・三二〇〇円）社会主義社会時代のモンゴルの女性たちの姿を、人類学の見地から考察。詳細なインタビュー調査をもとに、その実像を浮き彫りにする。第八回東北大学出版会若手研究者出版助成採択作品。

流通経済大学出版社

- ▼野尻俊明著『貨物自動車政策の変遷』(A5判・二七四頁・四六三〇円) 長年にわたり内外の物流政策、貨物運送法制を研究してきた著者による渾身の力作。わが国の貨物自動車に関する法律、制度の端緒から現在までを、事業規制と規制緩和をキーワードに丹念にフォロー。
- ▼ドナルド・マッケンジー著/岡本紀明訳『金融市場の社会学』(A5判・二五二頁・三二〇〇円) 金融市場(LIBORやデリバティブ及び裁定取引など)・企業会計・排出量取引を社会学的視点から考察し、市場の抽象的側面だけでなく、物的な側面にも焦点を当てて分析することの重要性を鋭く指摘した一冊。
- ▼流通経済大学スポーツ健康科学部ゼミ運営委員会著『スポーツの世界を学ぶ―スポーツ健康科学入門―』(A5判・一〇六頁・一〇〇〇円) スポーツを学ぶことを通じて、「人間力」に富んだ国際人を育てる。あらゆる生命に対する尊崇の念を理解するために、人間としての優しさ、他者に対するおもしろいやりの心、またそれを守り抜くという強くてたくましい精神を育む書。

聖学院大学出版社

- Asuyoshi Fujiwara, Brian Byrd, eds.
A Theology of Japan: Monograph Series 7
The Church Embracing the Sufferers, Moving Forward: Centennial Vision for Post-disaster Japan: Ecumenical Voices (B5変型判・一三四頁・二五〇〇円)
- 第二回東日本大震災国際神学シンポジウム「苦難に寄り添い前に向かう教会」(二〇一三年三月開催、東日本大震災国際神学シンポジウム「いかにしてもう一度立ち上がるか―これからの一〇〇年を見据えて」の第二弾)の講演を中心にまとめられている。
- フラー神学大学院R・J・マオ学長の講演、パネリストの発題、分科会・全体会報告等を所収。教派・教会を超えた支援の働きを振り返り、今後必要な教会およびキリスト者の姿勢を提言する。



聖徳大学出版社

- ▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係』(四六判・二八〇頁・二〇〇〇円)
- 音楽療法の第一人者である著者が音楽療法の理論、心身と音楽との関係を詳しく明かす。専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。
- ▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから』(四六判・二八〇頁・二〇〇〇円)
- 医師である著者が医療現場での経験をもとに、病氣と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粋な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。
- ▼川並知子著『さくら紙あそび』(B5判・六四頁・六五〇円)
- ▼川並知子・広瀬知里共著『子どもと親のためのおりがみアイデア』(B5判・一三八頁・一五〇〇円)
- ▼聖徳大学特別支援教育研究室編『改訂版一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援』(A5判・二一八頁・一五二八円)

麗澤大学出版会

▼ステイヴン・プロセロ著／堀内一史訳『宗教リテラシー—アメリカを理解する上で知っておきたい宗教的教養』（四六判・四三二頁・二八〇〇円）信心深い宗教に關して無知なアメリカ人。宗教的無教養の問題に一石を投じる本書は、アメリカ史、公教育、市民社会、政治など、多様な事柄と宗教との深い関係を解説する。

〈目次〉

序章
第1部…問題の所在—第1章 宗教的無教養人の国／第2章 宗教は重要
第2部…過去—第3章 エデンの園（私たちがかつて知っていたこと）／第4章 墮落（私たちはどのように忘れたか）
第3部…提案—第5章 罪の贖い（何をすべきか？）／第6章 宗教リテラシー
辞典



慶應義塾大学出版会

▼井筒俊彦著『井筒俊彦全集 第七巻』（四六判・七二〇頁・七八〇〇円）一九八一—八三年の著作を収録。代表作「イスラーム文化」「コーランを読む」、単行本未収録の読書アンケート、師や旧友の死を悼む情緒溢れるエッセイ等、円熟期の豊かな思索が見られる。月報『河合俊雄、湯川豊、ヘルマン・ランドルト』。

▼羽室英太郎著『情報セキュリティ入門（第3版）』（A5判・三八四頁・二八〇〇円）スマホが乗っ取られた！不正送金ウイルス？ パスワードの使い回しはなぜ危険？ 複合機、仮想通貨のセキュリティ等々、最新トピックを大幅に追加し記述内容も最新にアップデート。情報セキュリティの定番入門書、第3版！

▼佐々木敦著『あなたは今、この文章を読んでいる。—パラフィクションの誕生』（四六判・二九六頁・二〇〇〇円）円城塔、伊藤計劃、筒井康隆、辻原登、舞城王太郎、コルタサル等のメタフィクションの傑作の数々を通して、読むたびに生成する物語形式「パラフィクション」を提言。メタの臨界点を突破する、二〇一〇年代のための衝撃のフィクション論。

産業能率大学出版部

▼『数字でとらえるホスピタリティー—計&ファイナンス』徳江順一郎編著／長谷川恵一・吉岡勉著（A5判・二〇〇〇円）ホスピタリティー産業がすっかりと確立していくために必要なホスピタリティーの計数知識を凝縮して解説する。

▼『新装版 人生に奇跡を起こす』J・マーフィー著／玉木薫訳（四六判・一五〇〇円）マーフィー博士の珠玉の名著が読みやすくなって登場。不和のあるところに調和を、苦痛のあるところに平安を、悲しみのあるところに喜びをもたらすマーフィーの法則が平和、満足を与える。

▼『ファイナンス・イノベーション—企業のお金にまつわるノウハウ』内山力著（A5判・二〇〇〇円）ブラックボックスと化した企業の「ファイナンス」をオープンにし、「ファイナンスをイノベーションに活かす」ために、ファイナンスのすべてを余すことなく伝授する。

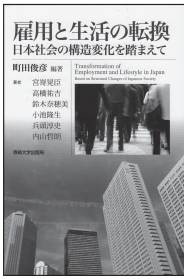
▼『ケースでわかる流通業の知識』寺嶋正尚著（A5判・一六〇〇円）各章に入れたさまざまなケースと流通業界の知識をスッキリまとめた構成で、流通業をますます好きになる。

専修大学出版局

▼『雇用と生活の転換 日本社会の構造変化を踏まえて』町田俊彦編著(四六判・二六六頁・一七〇〇円)

震災後の経済動向における、深刻な雇用問題とワーク・ライフ・バランスに焦点を当てる。また、過酷な労務管理をする企業の実態や、労組や生協の重要な役割について明らかにし、人間らしい労働と生活とは何かを考えていく。

町田俊彦「グローバル資本主義下の(生活)と(労働)」／宮崎晃臣「日本経済の現状と雇用問題」／高橋祐吉「働く・働けない・働かない」／鈴木奈穂美「日本のワーク・ライフ・バランスの実情」／小池隆生「労働と生活にとつての(安定)とは何か」／兵頭淳史「(G企業)時代における労働政策と労働組合」／内山哲明「協同組合と社会経済運動」



大正大学出版会

【既刊紹介】

▼『安楽律院資料集』小此木輝之編(A5判・五三八頁・一二〇〇円)

本書は、近世期において戒律復興を試みた安楽律院所蔵資料の翻刻である。大乘戒を是とする日本仏教において、伝統的な小乗戒(四分律)の提唱は波紋を呼んだ。律僧の追放と本復、幕府の介入など、いわゆる「安楽騒動」を知るための格好の資料集である。

ちなみに安楽律院は近年、映画「るろくに剣心」のロケ地としても有名である。

▼『釈浄土群疑論』の研究』金子寛哉(B5判・六六〇頁・一三〇〇円)

『釈浄土群疑論』は中国浄土教を大成した善導(ぜんどう)以後の浄土教に関する疑義に弟子の懐感が答えたものである。本書は、この懐感(えかん)の人物像を明らかにし、その思想に迫る。また、日本浄土教に与えた影響などについても幅広く論述する。

法然・親鸞に至る思想的系譜を探索したい方におすすめの一冊である。

玉川大学出版部

▼橋本鉦市著『高等教育の政策過程―アクター・イシュー・プロセス』(A5判・二六八頁・四二〇〇円) 高等教育研究が制度化されるなかでこれまで手薄だった政策過程研究について、理論的な方法論と実証的なケーススタディの検討をおこなう。戦後日本のアクター(政策主体)とイシュー(問題点)を抽出し、実施段階までのプロセス(形成過程)全体やブラックボックス化されてきた各種審議会の議論などを取り上げる。今後の本格的な研究のマイルストーンとなる書。

▼スーザン・A・アンブローズ他著／栗田佳代子訳『大学における「学びの場」づくり―よりよいティーチングのための7つの原理』(A5判・二六八頁・三二〇〇円) 学生の学習をどのように支援すればよいのだろうか。研究成果から導かれた七つの鍵となる学習原理を紹介する。実際の事例を題材にした分析を通し、教員の遭遇する問題の核心を解明。導き出された原理を学習に活かすための方法、授業設計に役立たせる方策を具体的に提示する。授業の改善を目指し、よりよい教育をおこなうための必携書。

中央大学出版部

▼角田邦重著『労働者人格権の法理』（四〇〇〇円）労働関係と職場の中で労働者は人格の主体にふさわしい処遇と職場環境の享受を認められなければならないのに、多発する職場いじめやパワーハラスメントなどこれと相容れない事態が広がっている。労働者人格権の法理を提唱しその克服に努めてきた著者の意欲研究。

▼飯塚容著『中国の新劇と日本―「文明戯」の研究』（二七〇〇円）一九一〇年代の中国で隆盛をきわめた「文明戯」（新劇）は、日本演劇の影響を強く受けている。本書は、日本から中国へ移植された「文明戯」の演目に関する専門的な研究として学術的な意義が大きい。日本の明治文学の中国への伝播、日中両国における西洋演劇の受容についての事例を数多く紹介する。

▼矢内一好著『英国税務会計史』（三二〇〇円）英国は世界最初の所得税導入国であるが、最近の税制は米国をしのご急進的な内容である。本書は、英国における企業会計と課税所得計算が分離しているかを米国に次いで解明した、本邦初の英国所得税・法人税の歴史全体の研究書。

東京大学出版会

▼濱田純一著『東京大学 世界の知の拠点へ』（四六判・四〇〇頁・二〇〇〇円）秋入学、推薦入試、教育カリキュラム改革、研究倫理プラン策定、震災復興支援など、揺れ動く社会のなかで新たに動き出す東京大学。総長が式辞・告辞・講演などの機会に発した折々のメッセージを通じ、東大をはじめとする大学と学問、さらには日本と世界の今後の歩みを的確に見定める。構想ビジョンの書き下ろしに加え、教育改革を画す重要文書と軽妙なコラムも収録。

▼江川雅子・東京大学教養学部教養教育高度化機構編『世界で働くプロフェッショナルが語る―東大のグローバル人材講義』（A5判・二五六頁・二四〇〇円）国連機関、世界企業／起業、大学、NPOなど国際的なキャリアを歩んでいるプロフェッショナルが、自らのライフコース、求められる資質などを熱く語った大講義の書籍化。「講演者」根本かおる／渋谷健司／田瀬和夫／上田隆文／小林立／木山啓子／小暮真久／岩瀬大輔／繁田奈歩／エアン・ショー／樋口泰行／白石隆／郡山幸雄

東京電機大学出版局

▼日高一義監訳／IBM東京基礎研究所翻訳チーム訳『サービスサイエンスハンドブック』（B5判・七二二頁・一四〇〇円）サービスは常に私たちの傍にあり、人類が社会を作り助け合い、資源を共有することの基本となっている。本書では、サービスの実像・役割を科学的に明らかにする。抽象的に扱われやすい「サービス」を具体化し、ビジネスにおける諸問題を解決する理論と実践を示す。世界を代表する執筆陣により「サービスサイエンス」を体系的にまとめた。

▼椎葉究編著「ノ瀬靖則、鈴木啓太郎、乙部千雅子、青木法明著『シリアルサイエンス おいしさと栄養の探究』（B5判・二三四頁・三二〇〇円）私たちの食卓の主食となっているコムギとコメ。そのおいしさは、様々な製造方法、加工法により変化する。本書では、製造、加工の原理と応用、それに伴う化学変化、穀物の構造や機能、他の作物にはない栄養成分について、穀物の社会的役割と食糧を取り巻く現代の課題を交えながら、「おいしさと栄養を最大限高める」ための秘訣を、初学者向けに解説した。

法政大学出版局

- ▼江橋崇著『花札』（四六判・三七四頁・三五〇〇円）法制史を始め文学作品におよぶ膨大な文献を渉猟し、花札をその本来の輝き、自然を敬愛して共存する日本の文化という特性のうちに描き、花札賭博という強固なイメージを正す力編。
- ▼D・リヴィングストン／梶雅範・山田俊弘訳『科学の地理学』（四六判・三一〇頁・三八〇〇円）科学的客観性がつねに「どこからかの見方」にほかならないことを提示し、「地理学的転回」を試みる。
- ▼C・ペイトマン／山田竜作訳『秩序を乱す女たち？』（四六判・三六四頁・三九〇〇円）ルソーをはじめ従来の政治理論家は、女性を社会秩序を破壊するので危険と考え、排除しつづけた。世界的に著名な政治学者が、これをフェミニズムの視点から批判的に再検討する書。
- ▼G・ミノワ／石川光一訳『無神論の歴史』（上・下セット、函入り、四六判、一一五四頁、一三〇〇〇円）古代・中世の異端説から、啓蒙の懐疑論や理神論をへて現代の唯物論に至るまで、既成秩序への抵抗と世俗化の根拠となった無神論哲学の多様な系譜を一望のもとに描く。

武蔵野大学出版会

- ▼佐藤佳弘著『脱！スマホのトラブル＆LINEフェイスブックツイッターやって良いこと悪いこと』（四六判・一六〇頁・一二五〇円）スマホの利用者が直面する危険を数え上げると、その数は六〇項目を超えるという。小中高校で「スマホの危険」や「正しい使い方」について数多く講演をしている著者が、そのトラブルの事例と対策を、豊富なイラストと共にやさしく解説する。



- ▼浅川公紀著『国際政治の構造と展開』（四六判・四七二頁・三三〇〇円）国際政治システムの生成から展開、冷戦時代（米ソ両極体制）、冷戦後の秩序（ポスト冷戦秩序）、外交政策の形成と実施、安全保障の追及など、国際政治のすべてをこの一冊に集約している。
- ▼五味政信著『五味版 学習者用ベトナム語辞典』刊行間近。

武蔵野美術大学出版局

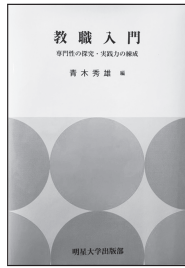
- ▼田中功起著『必然的にはらばらなものが生まれてくる』（A5判変型・二八八頁・三〇〇〇円）第五回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展（二〇一三）日本館代表アーティストとして特別表彰を受賞した田中功起。日常のシンプルな行為に潜在する文脈を映像やパフォーマンスを通じて視覚化・分節化する田中に相応しく、本書もまた分節され同時に重層的な構成となった。巻頭の鼎談では、複数の人々が共同で一つの課題に取り組む様子を写真と映像によって記録したヴェネチア・ビエンナーレ日本館の展示（抽象的に話すこと―不確かなものの共有とコレクティブ・アクト）の意義と意味を問う。また、ヴェネチアから初期（一九九八）の映像作品まで年代順に遡り、田中がみずからのテキストと作品を二七のテーマに分けて「作品」と「制作行為」について具体的に論じた書き下ろしテキストを収録。展覧会カタログや美術雑誌への寄稿のほか二〇〇〇年に「野比千々美」名義で発表した評論を再録し、評論家の林卓行との対話を巻末に収録。アーティスト田中功起の真髄に迫る。

明星大学出版部

▼『教職入門 専門性の探究・実践力の練成』青木秀雄編

(A5判・二八八頁・一六〇〇円)

教員養成の歴史、学校の組織・運営、教育行政と学校、教育法規、さらに社会環境との関わりなどに触れながら、教員に必要なとなる知識と心構えを解説する。



▼『教職実践演習 磨きあひ高めあう熱意ある教師に』青木秀雄編

(A5判・二七二頁・二〇〇〇円)

▼『現代初等教育課程入門』青木秀雄編

(A5判・三〇六頁・一六〇〇円)

▼『現代中等教育課程入門』吉富芳正編

(A5判・二九八頁・一六〇〇円)

関東学院大学出版会

▼山田銃一著『ユーザーのための金属基複合材料』(A5判・一三六頁・一八〇〇円)

金属基複合材料は、作り方によって十分な特徴が発揮出来たり出来なかつたりする。本書は理論の解説ではなく、実際に作製した複合材料の特徴とその限界をまとめたものである。



▼斎藤困・本間英夫・山下嗣人著『新めつき技術』(A5判・三四四頁・三二〇〇円)

電気めつきと無電解めつきを中心に、その原理・分類などの基礎知識から各種めつき技術、エレクトロニクスをはじめとする最先端分野への応用について、最新の研究成果を含めて解説する。



東海大学出版部

▼岩手大学宮澤賢治センター編『賢治学第1輯』(A5判・二〇〇頁・一六〇〇円)

作家や詩人としてだけでなく、地質学者、宗教家、教師、採石技師など多くの職業に携わり、登山、音楽、語学、演劇などにも関心を寄せた宮澤賢治の多彩な顔を研究成果として発信する。



▼フォルカー・ベルクハーン著／鍋谷郁太郎訳『第一次世界大戦1914-1918』(A5判・二六二頁・二八〇〇円)

開戦時の各国住民の行動や思考、総力戦化の中での前線兵士の生活や思考の変化、戦後における非戦闘住民の生活や戦闘意識と厭戦意識の複雑な絡まり方を詳細に描き出し、第一次世界大戦の原因と経過を多方面から考察する。



名古屋大学出版会

- ▼小杉泰・林佳世子編『イスラーム 書物の歴史』(A5判・四七二頁・五五〇円) 近代以前、イスラーム世界は中国と並ぶ、世界の書物文化の双壁であった。広大な知と文芸を支えた華麗なる書物の歴史を、デジタル時代の今、ふり返る。
- ▼北村洋著『敗戦とハリウッド占領下日本の文化再建』(A5判・三一二頁・四八〇〇円) なぜ日本人はハリウッド映画を受け入れたのか。検閲や配給をめぐる試行錯誤からファン文化の形成まで、熱狂と葛藤に満ちた占領の文化史。
- ▼山岸敬和著『アメリカ医療制度の政治史―20世紀の経験とオバマケア』(A5判・三七六頁・四五〇〇円) 豊かなはずの国でなぜ国民皆保険が難しいのか。オバマケアの挑戦を、長期的視野と現地の「声」からリアルに捉え、アメリカ政治と医療の行方を展望する力作。
- ▼杉山直監修『物理学ミニマ』(A5判・二七六頁・二七〇〇円) 力学、電磁気学から実験物理まで、大学でマスターすべき全分野をコンパクトに凝縮! 物理学体系を一望できる本書は、大学院入試のための参考書にも最適である。

三重大学出版会

- ▼『ファッショナブル衣生活』増田智恵他編(A4版、一四頁、二〇〇〇円)
- Part 1 衣生活を育む 1 選択力アップ 衣服と靴のサイズ、素材と服のシルエット・デザイン 管理と素材 2 着心地アップ 身体の動きと衣服・靴のゆとり 衣服・靴のデザインと着心地 3 着心地の良い素材、着心地の良い管理 装い力アップ 体形のイメージと身体サイズ
- 4 体形と衣服デザイン 素材・デザインの組み合わせ 5 管理能力アップ 洗濯：クリーニング：保管：廃棄と再利用 6 実践力アップ 体形と素材によるデザインイメージの違い 6 種類の素材によるフレアースカートの視覚的・物性的違い
- 素材による管理方法の違い 6 種類の素材物性的違いに対応した管理方法 購入時でのタグ表示の見方
- Part 2 衣生活の現状 1 ファッションを生み出すアパレル 2 既製服 3 デザインと販売企画 試作と見本市 本生産と販売 販売結果 売れ高 消費者動向と企画のずれ 4 購入者へのアドバイス 5 製品チェック サポートセンターの利用 6 衣生活への提案

京都大学学術出版会

- ▼小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』(変容する親密圏/公共圏8、四〇〇〇円) 恋愛や性愛はどのようなものとして表象/実践されたのか? マンガ・雑誌などのメディアにおける性の表象を分析、考察しながら、戦後のセクシュアリティ規範を問い、親密性の内実を歴史的に解明する。
- ▼アエリウス・スバルティアヌス他『ローマ皇帝群像』全四冊完結。(揃一三六〇〇円、西洋古典叢書) 紀元一七七年即位のハドリアヌス帝から約一七〇年にわたる、七〇人以上の皇帝たちの生涯を綴った貴重な伝記集。属州統治から宮廷のゴシップまで満載。最終分冊には詳細な解題と索引を付した。本邦初訳。
- ▼池島祥文著『国際機関の政治経済学』(二二〇〇円) 国家や資本と入れ子のよう重層して活動しながら、途上国市場の創出や世界的な市場統合を推進している国際機関。表面的には見えにくいその組織構造や特性に着目することで、国際機関による市場形成の実情をあぶり出す。

大阪経済法科大学出版部

【既刊書紹介と刊行予定】

▼『21世紀の東アジア—平和・安定・共生』（藤本和貴夫・宋在穆編、二〇一〇年三月刊、二五〇〇円）

本書は、二〇〇八年に大阪国際交流センターで開催された第五回東アジア国際学術シンポジウム「21世紀の東アジア—平和・安定・共生」で発表された報告論文を編集したものである。

三つの分科会において、中国、台湾、韓国、タイ、マレーシア、フィリピン、ベトナム、ラオス、カンボジア、インド、インドネシア、ロシア、アメリカ、日本の計一四カ国・地域の三二名の研究者より報告があり、活発な議論がなされた。

第一部 平和と安全保障

第二部 持続可能な経済発展と環境保全
第三部 国際移住と共生社会

二〇一四年一月刊行予定

▼『北東アジアの平和構築—緊張緩和と信頼構築のロードマップ』

目次 第一部 北東アジア情勢と平和構築の課題／第二部 平和と安全保障における自衛権論の検討／第三部 市民による平和と人権の推進

大阪大学出版会

▼日本骨代謝学会ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドライン改訂委員会編『ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドライン 二〇一四年改訂版』（二五〇〇円）

ステロイドの副作用全体の約四分の一を占める「骨粗鬆症」の管理と治療についての一〇年ぶりに改訂された新ガイドラインを示し、ステロイド性骨粗鬆症の病態と治療における最新の知見を紹介する。▼歳岡冨香著『A STUDY ON METAPHORICAL EVALUATION IN WRITTEN TEXTS FROM A PERSPECTIVE OF COGNITIVE LINGUISTICS』（三五〇〇円）

書き手が比喩表現により「評価」を表す現象について、そのメカニズムの認知言語学的分析を柱としながら、認知言語学的比喩研究が翻訳研究へと応用可能であることを論ずる。具体的には、人を動物に喩える直喩表現の表す評価、音楽を描写する文章における共感覚比喩の表す評価、および村上春樹のエルサレム賞スピーチにおける非慣習的な比喩表現の表す評価について、認知言語学の立場から考察する。

関西大学出版部

▼片桐新自著『不透明社会の中の若者たち—大学生調査25年から見る過去・現在・未来—』（A5判・二〇〇〇円）

東日本大震災後、先行きが不透明になった日本社会を大学生たちはどう捉え、生きていこうとしているのか。昭和の終わりから継続してきた大学生調査を通じて、日本社会の過去・現在・未来を、若者の意識と価値観から見直す渾身の一冊。

▼森貴史他共著『ドイツ奇人街道』（四六判・二〇〇〇円）

日本ではこれまであまり語られることのなかったドイツの奇人たちの生涯と実像を、関連の深い都市と共に、新資料から明らかにする伝記集。ペアーテ・ウーゼ、サン・ジェルマン伯爵、シュテルテベーカーなどを紹介。

▼野村幸正著『個人科学としての心理学』（四六判・二五〇〇円）

心理学が学として確立するためには、現行の分析科学の限界を認識し、それを代替、補完する科学が不可欠である。本書は東洋思想を基軸にして前概念的な生の世界、つまり体験の内容ではなく過程（純粹経験）に着目し、その普遍性を独自の実践を介して吟味する。

関西学院大学出版会

- ▼鷺尾友春著『6つのケースで読み解く日米間の産業軌轢と通商交渉の歴史―商品・産業摩擦から構造協議、そして広域経済圏域内の共通ルール設定競争へ』(A5判並製・三四頁・二八〇〇円)
- ▼山路勝彦著『大阪、賑わいの日々―二つの万国博覧会の解剖学』(A5判上製・三六二頁・三八〇〇円)
- ▼中国モダニズム研究会著『ドラゴン解剖学・登竜門の巻 中国現代文化14講』(A5判並製・二二〇頁・一八〇〇円)
- ▼松本明美著『白の修辞学―エミリイ・ディキンソンの詩学』(A5判上製・二二四頁・二八〇〇円)
- ▼湯浅忠著『中堅・中小企業のビジネス・イノベーション―「関西―IT百撰」から学ぶ三つの法則』(A5判並製・一四〇頁・一六〇〇円)
- ▼市川文彦ほか著『KGRいぶれっと38『スポーツの経営史―その多様なアプローチを指して』』(A5判並製・九〇頁・八〇〇円)
- ▼今田忠著、岡本仁宏補訂『概説市民社会論』(A5判並製・三三八頁・三二〇〇円)

広島大学出版会

- ▼吉中孝志著『名前で読み解く英文学―シェイクスピアとその前後の詩人たち』(四六判・一五九頁・八五〇円) 英文学の名者に登場する人物の名前に隠された著者自身や愛するひとの名前の痕跡を分析することによって、詩人たちの生きた時代や彼らの心を読み解こうとする意欲作。



- ▼大塚豊記『国際連盟教育使節団 中国教育の改進』(A5判・二〇二頁・二五〇〇円) 一九三一年に中国に派遣された国際連盟教育使節団の目には、当時の中国教育がどう映ったか。当時の報告書が中国の近代教育史、国際関係史を読み解く貴重な史料として完全邦訳で甦る。
- ▼広島大学大学院文学研究科教務委員会編『改訂版 人文学へのいざない』(新書判・三二六頁・九〇〇円) これから文学部で学ぼう! 文学部に進学したい! という人々に向けて人文学研究の醍醐味などを語る。

九州大学出版会

- ▼相馬伸一編訳、宮坂和男・矢田部順二共訳『ヤン・パトチカのコメニウス研究―世界を教育の相のもとに』(A5判・四四〇〇円) チェコ二十世紀を代表する哲学者パトチカが、彼の祖国が生んだ十七世紀の教育思想家コメニウスを扱った論文八編から構成。
- ▼ダニエル・ストラック『近代文学の橋―風景描写における隠喩的解釈の可能性』(A5判・五四〇〇円) 「風景描写の導入が必然的に歌枕を後退させた」という提案のもと、彼岸と此岸、生と死、そして聖と俗を「つなぎ」「隔てる」場としての橋を分析し、近代文学の深層を眺める。(第5回九州大学出版会・学術図書刊行助成対象作)
- ▼九州大学文学部編集・発行『九州大学文学部90年の歩み』(A5判・一〇〇〇円) 九州大学文学部の前身である九州帝國大学法文学部の創設から九〇周年を迎えるのを記念して、文学部の歴史を振り返る。写真編(文学部の変遷・研究室の諸相)、本編(文学部通史・研究室史)、資料編(人事資料・統計資料・年表)からなり、卒業生必読の書。

(株)朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2	TEL:03-5540-7749
亜細亜印刷(株)	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154	TEL:026-243-4858
(株)アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408	TEL:03-3235-1360
尼崎印刷(株)	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20	TEL:06-6494-1122
(株)ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階	TEL:03-5652-8627
王子製紙(株)	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5	TEL:03-3563-7072
岡本出版発送(株)	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2	TEL:048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ(株)	〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7F	TEL:03-6269-9550
(株)加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-6-9 NEX水道橋ビル	TEL:03-3261-8281
城島印刷(株)	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6	TEL:092-531-7102
(株)紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10	TEL:03-6910-0510
(株)クイックス	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F	TEL:03-3221-9150
(株)糸川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7	TEL:03-3943-9811
港北出版印刷(株)	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7	TEL:03-5466-2201
三松堂印刷(株)	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階	TEL:03-6823-5360
三美印刷(株)	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8	TEL:03-3803-3131
三立工芸(株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F	TEL:03-3261-5171
三和印刷(株)	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1	TEL:026-285-2300
信濃印刷(株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11	TEL:03-3237-3601
(株)渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7	TEL:026-244-7185
(株)真興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2	TEL:03-3462-1181
新日本印刷(株)	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342	TEL:03-3269-3611
創栄図書印刷(株)	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上る天守町766	TEL:075-255-2288
大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20	TEL:0952-71-8550
ダイニック(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル	TEL:03-5402-1811
(株)太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16	TEL:03-3474-2821
(株)太平洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1	TEL:058-324-2111
(株)竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6	TEL:03-3292-3617
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711	TEL:0424-92-4359
(株)東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34	TEL:03-3291-1771
(株)とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11	TEL:03-3571-6000
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15	TEL:03-3632-0801
(株)トヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7	TEL:075-411-8288
図書印刷(株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36	TEL:03-5843-9700
(株)日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7	TEL:03-5255-2198
萩原印刷(株)	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12	TEL:03-3811-4272
(株)博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F	TEL:03-6441-6711
藤原印刷(株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5	TEL:03-3291-0191
(株)平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7	TEL:03-3944-0301
(株)堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5	TEL:048-422-0029
(株)毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1	TEL:03-3212-3340
誠製本(株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5	TEL:03-3967-3952
(株)遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31	TEL:06-6304-9325
(株)読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1	TEL:03-3242-1111
ライトコミュニケーション(株)	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F	TEL:03-3251-7571
渡辺印刷(株)	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1	TEL:03-3718-2161

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介します。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

大学出版部協会創立50周年記念シンポジウム・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【6月刊】

2013年5月から4回にわたり開催された連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果から2点がブックレットに。
日本生命財団学術書出版助成図書



座小田豊 ざこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）

田中克 たなかまさる（京都大学名誉教授）

川崎一朗 かわささいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知 3・11以後を生きる

A5判・80頁／定価（本体1,000円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？——これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靱な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉

第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章 森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章 災害社会——本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）



中村哲之 なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）

渡辺茂 わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）

開一夫 ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）

藤田和生 ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性 脳は世界をいかに捉えているか

A5判・80頁／定価（本体1,000円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉

第一章 トリの「視る」世界——動物の錯視と心（中村哲之）／第二章 ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章 脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章 討論——心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）

ナチュラリストリーの時間

大学出版部協会編 A5判/160頁/定価1680円

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラリストリーを愉しむ

I. Prologue of Natural History

- 第1話 自然を記録すること……斎藤靖二
第2話 自然史と本……青木淳一
第3話 日本のナチュラリストリー……岩槻邦男
コラム① 動物写真の世界

II. History of Nature

- 第4話 ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司
第5話 マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子
第6話 京都の語り部：深泥池……竹門康弘
第7話 遺跡の土に秘められた情報……松井 章
コラム② ききみみずきん
第8話 遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀
第9話 ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人
第10話 日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

III. Diversity of Nature

- 第11話 サクラソウとマルハナバチ……鷺谷いづみ
第12話 日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和
第13話 琉球列島の自然史……太田英利
第14話 マンボウと標本……松浦啓一
第15話 分類学事始め：タクソン、タイプ、名前……馬渡駿輔
コラム③ サルにノミはいない？ 幻の定説

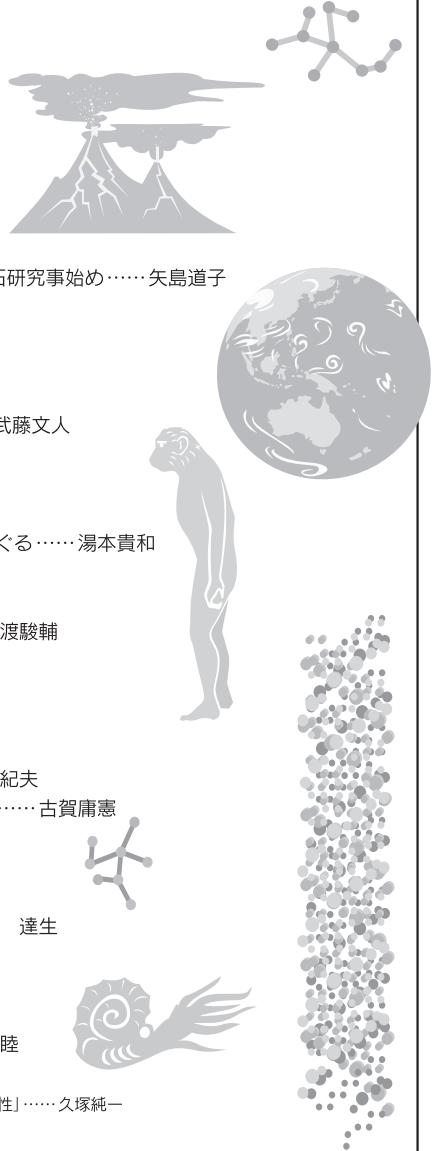
IV. Story of Nature

- 第16話 クマ大量出没の謎……大井 徹
第17話 ふしぎの国のアリ巣……丸山宗利
第18話 現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫
第19話 子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲
第20話 熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗
第21話 殿様の自然史……松岡明子
第22話 幻のロバと男たち……木村李花子
第23話 食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周 達生
コラム④ アリジゴクの自然史

V. Epilogue of Natural History

- 第24話 遺伝子を通じた動物との対話……村山美穂
第25話 ゲノム時代のナチュラリストリー……西田 睦
コラム⑤ 小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一
自然史文献リスト



平成26年度 第100回

全国図書館大会 東京大会

あした
大会テーマ：図書館文化を明日の力に

2014年10月31日（金）～11月1日（土）

開催会場：明治大学 駿河台キャンパス

分科会・展示内容

【JLA主催分科会】

- 第1分科会 公共図書館 全体会 本の力 図書館の力
第2分科会 公共図書館 第1分代会 望ましい基準をどう活かすか
～図書館の魅力を創造する実践報告
第3分科会 公共図書館 第2分代会 読書と図書館・書店
第4分科会 公共図書館 第3分代会 市民とつくる図書館
第5分科会 大学図書館 大学の知の発信システムの構築
～機関リポジトリの更なる発展をめざして～
第6分科会 短期大学・高等専門学校図書館 図書館の現場力を高める
第7分科会 学校図書館1 これからの学校図書館と学校図書館専門職員
～文科省報告書を中心に～
第8分科会 学校図書館2 学校司書の法制化を考える
第9分科会 専門図書館 世界の窓となるライブラリーin Japan
第10分科会 図書館情報教育 世界の図書館情報学教育
第11分科会 児童青少年サービス 読書が培う子どもの未来
～児童図書館の力
第12分科会 障害者サービス1 現行著作権法から分かる図書館の役割
第13分科会 障害者サービス2 「障害者の権利に関する条約」が目指すもの
第14分科会 図書館の自由 「政府言論」論から考える図書館の自由
第15分科会 出版流通 電子書籍導入とデジタルアーカイブ化の展開
第16分科会 図書館を語る 図書館を語る
第17分科会 資料保存 知っておきたいカビ対策のイロハ
～図書館現場のIPM～
第18分科会 職員問題 非正規雇用職員の今とこれから
第19分科会 多文化サービス 多様な文化を活かす図書館
第20分科会 認定司書 これからの図書館を支える認定司書のチカラ
第21分科会 健康情報 ちいさな図書館でもできる健康情報サービス
第22分科会 図書館と施設 第36回建築研修会
「明日の図書館その建築について考える」
第23分科会 利用教育 図書館利用教育の実践力
～委員会創設25周年、次に向けての展望を開く～
第24分科会 市民と図書館1 市民と図書館：図書館協議会
第25分科会 市民と図書館2 市民と図書館：図書館とマスメディア
第26分科会 ワークショップ 「こんなとこどうするの？」ワークショップ
第27分科会 ワークショップ 幅允率ワークショップ

【日本図書館協会 展示コーナー】

- テーマ展示
- 出版物販売、ほか

【公募分科会】

- No.101 前進する学校司書、進化する学校図書館
No.102 「こころ語る」3Dプリンターものづくり図書館 実証実験：
報告ワークショップ
No.103 「布給本の力」～33年の軌跡と障害者の権利条約に向けて～
No.104 視覚障害者へ新しい支援 本のテキスト化とテキストDAISY図書
No.105 ちいさなライブラリーから考える、これからの地域図書館のかたち
No.106 図書館への政策提言 ～行政職員の立場から～
No.107 デジタルアーカイブと電子書籍の導入とその実際
No.108 現代社会における移動図書館の役割を改めて考える
No.109 紛争後の国家や他民族国家における図書館事業
～カンボジア、ラオス、ミャンマーを事例に
No.110 スマートフォン時代の知の情報デザイン
～地域の魅力と体験を結ぶデジタルマップコミュニティ～
No.111 広域図書館行政と図書館再生―県立図書館を中心とした共同
保存の可能性
No.112 試してみよう！絵本の「読みあい」：
「読みあい」が生み出す不思議なチカラを体験する
No.113 電子書籍のアクセシビリティ―その現状と展望
No.114 本を巡る新たな試みと未来―図書館は進化の入口―

【公募展示】

- ICT地域の絆保存プロジェクト「東日本大震災を語り継ぐ事業」
 - 「地域文化遺産および地域資料を活用したパブリックサービスの展開
～新宿区立四谷図書館における地域関連事業を事例に～」
- 京女図書館基地～どこでも出張いたします～

連絡先

第100回 全国図書館大会東京大会 組織委員会事務局

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 公益社団法人日本図書館協会内

電話：03-3523-0814 FAX：03-3523-0844

好評発売中

画像史料論——世界史の読み方

吉田ゆり子／八尾師誠／千葉敏之 編

歴史を学び、地域を探究するために、私たちは“過去からのメッセージ”とどのように向き合えばよいのか。古今東西の画像を、歴史研究・地域研究の史料として扱うための方法と意義を論じる。

A5判 並製 326頁 定価：本体2,800円＋税

人はみなフィールドワーカーである

——人文学のフィールドワークのすすめ

西井涼子 編

歴史学・言語学・人類学の、第一線の研究者十七名が、アジアからアフリカにかけての広範な地域を対象にフィールドとの関わりを語る。日常と、世界と、知を「フィールドワーク」するための入門書。

A5判 並製 296頁 定価：本体2,300円＋税

東京外国語大学出版社
Tokyo University of Foreign Studies Press

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 TEL：042-330-5559
URL：www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/

東京学芸大学出版会

江戸の教育力

——近代日本の知的基盤

大石学 著

四六判 160頁 1200円＋税

意外や意外、江戸時代は武士も農民も町人も上下の別なく教育熱が高かった。当時の外国人も驚いたその教育力の広まりは、実は明治以降の急速な近代化を支えたものでもあった。



大石学新刊
企画進行中

好評発売中

「もじゃぺー」に〈しつけ〉を学ぶ

——日常の「文明化」という悩みごと

山名淳著 四六判 192頁 1200円＋税

ドイツで150年以上にわたって愛されてきた絵本「もじゃぺー」は、もともと残酷な話だった「もじゃぺー」は、さまざまな形に増殖して読み継がれてきた。その変化から、近代化としつけの関係を読み解く。

GIP

[TEL] 042-329-7797 [FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp/press

既刊 35点「研究のWASEDA」
早稲田大学学術叢書

オフエンバックと大衆芸術

パリジャンが愛した夢幻オペレッタ

森佳子 著 19世紀パリ、オペレッタの創始者として知られるジャック・オフエンバック。夢幻自在に、常に大衆を魅了し続けたその作品を再評価する。 8200円＋税

英国のシティズンシップ教育

社会的包摂の試み

北山夕華 著 移民の増加、多文化化、グローバル化が進むなか、いかに子どもたちを排除の構造から救うか。英国における問題克服の取り組みを明らかにする。5400円＋税

An Automodular View of English Grammar

Ueno, Yoshio 著 シカゴ大学名誉教授 Jerrold M. Sadock によって提唱された言語学のAMG理論。その最新版を全編英文で紹介・解説。Jackendoff 教授推薦。 8400円＋税

早稲田大学出版部

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-1-7
☎03-3203-1551 http://www.waseda-up.co.jp/

— 筑波大学の知の発信 —

筑波大学出版会

http://www.press.tsukuba.ac.jp/

A4判・228頁・本体1800円＋税・ISBN978-4-904074-29-9

福原直樹・伊藤純郎 編著

筑波大学の40年

筑波大学新聞で読む

A5判・388頁・本体2800円＋税・ISBN978-4-904074-19-0

生誕150周年記念出版委員会 編

嘉納治五郎

気概と行動の教育者

お求めは全国の書店、
または丸善出版株式会社へ。
TEL.03-3512-3256 FAX.03-3512-3270
http://pub.maruzen.co.jp/



表紙写真：フランスの金属活字
(撮影：阿部卓也)

大学出版 100号 (2014年秋)
2014年10月1日発行
頒価 100円(〒共)

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <http://www.ajup-net.com/>

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

■ 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市府畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

■ 聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

■ 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

■ 産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12
サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

■ 専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-8
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311 FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局

〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎1F
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

■ 関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜年金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-786-2932

■ 東海大学出版部

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35
東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

■ 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

■ 三重大学出版会

〒514-8507 津市江戸橋2-174
三重大学附属病院5階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

■ 京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-9592

■ 広島大学出版会

〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL 082-424-6226 FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146
九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

■ 東京農業大学出版会(休会)

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666 FAX 03-5477-2747